

薬学教育評価機構から適合認定を受けました

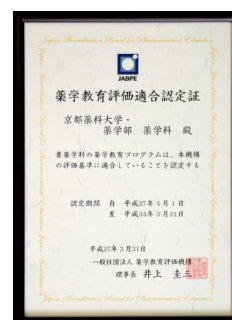
学長 乾 賢一

2006年度から開始された「6年制薬学教育」は、その実施にあたり、中央教育審議会（中教審）の答申「薬学教育の改善・充実について」（2004年2月）において、薬学教育関係者、職能団体、企業関係者のみならず薬学以外の者の参画を得た第三者評価の必要性が記載されました。さらに、衆参両院の文部科学委員会でもその法改正において、第三者評価の実施が付帯決議として要請されました。

このような背景の下、2008年12月に、全国74の薬科大学・薬学部、日本薬剤師会、日本病院薬剤師会および日本薬学会の合計77団体を構成員とした「一般社団法人薬学教育評価機構（JABPE）」が設立されました。本学では2009年度に、薬学教育評価機構が定めた「薬学教育（6年制）第三者評価 評価基準—2007年度版」に基づき「自己評価21」を実施し、2014年度に同機構の「薬学教育評価（第三者評価）」を受審することにしました。今回、受審に向けて、2013年4月に自己点検・評価運営委員会を設置し、約1年間をかけて、主に本学の「6年制薬学教育プログラム」の自己点検・評価を行い、「自己点検・評価報告書」*を作成し、必要資料等を添えて評価申請を行いました。その後、2014年4月から書類審査・訪問調査等を経て、2015年3月に「京都薬科大学（6年制薬学教育プログラム）は、薬学教育評価機構が定める『薬学教育評価 評価基準』に適合している」との評価認定を得ました（認定期間：2015年4月～2022年3月ま



薬学教育評価機構 認定マーク



認定証

での7年間）。総評においては、「明確な教育理念に基づき構築された教育プログラムと、それを実践するための優れた教員および設備を有し、教育・研究への熱心な姿勢と活動が認められる。今回の第三者評価により指摘された改善すべき点および助言を踏まえた改革により、単科の私立薬科大学の模範となるべく、さらに発展することを期待する」と高く評価されました。

本学は、今回の評価結果を真摯に受け止め、改善すべき点および助言については早急に対策を講じるとともに、高い評価を受けた事項についてもさらなる向上に向けて全職員一丸（「チーム京薬」）となって取り組む所存です。本学のさらなる飛躍にご期待ください。

※自己点検・評価報告書は本学ホームページ、薬学教育評価機構ホームページにてご覧いただけます。

CONTENTS

■ 特集

授業改善に向けた取り組み 7~10

■ ご挨拶

ご挨拶 2~6

■ コラム

私の薦める、私の一冊 10

卒業生からのメッセージ 17

KPUこぼれ話 17

学生相談室だより 23

■ 報告

薬学教育評価機構から適合認定を受けました 1

2014年度 授業評価集計結果の報告 11

大学院トビックス 24

受賞 26~27

2014年度決算について 28~29

平成27年度科学研究費助成事業 採択状況 30~31

京都薬科大学奨学金寄付金芳名録 32

■ イベント

第6回KPUシンポジウム 12~13

マレーシアでの化粧品学実習と薬局見学について 14~15

「第29回日本医学会総会 2015 関西」を終えて 15~16

大学院英語プレゼンテーションセミナーについて 25

米国消化器病学会 (AGA) に参加して 26

■ お知らせ

京薬会だより 6

Library News 13

2015年度試験関係日程 18

2016年度 京都薬科大学入学試験について 19

教育後援会からのお知らせ 20

2016年度 大学院入学選考概要 20~21

2015年度 生涯教育eラーニング講座概要 22

お知らせ 27

クラブだより 31~32

就 任 の ご 挨拶



研究科長

教授 山本 昌

私は、2015年5月から薬品物理化学分野の小暮健太郎先生の後任として研究科長を拝命致しました。色々と不慣れな点も多く、皆様方には御迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、微力ながら研究科長の職を務める所存ですので、何卒宜しくお願い申し上げます。

ところで、学生の皆さんは、「研究科長」って何をする役職なのか御存知でしょうか？あまり御存知でない学生の皆さんもおられると思いますが、研究科長は、簡単に言えば大学院の講義、セミナー、入学試験、制度や学位授与の可否決定などの取りまとめを担当する役職です。したがって、現在既に大学院に進学されている方や今後、大学院に進学予定の方には色々と関わりが出てくると思いますので、その際には宜しくお願い致します。

御承知のように、薬学部が6年制に移行してから大学院の制度も変わり、現状の6年制の薬学制度では6年の学部教育を終えた後、4年間の大学院博士課程が設置されています。現在、多くの学生は、学部6年間で卒業されてそのまま社会に出られています。これからは社会において学位取得が今まで以上に重要になってくると思います。大学に残って教員を目指す方はもちろん、製薬企業で研究職や臨床開発職に

就職を希望される学生にとっても、製薬企業のグローバルな海外展開に伴い学位が必要になっています。また、企業以外でも病院などに就職される場合でも将来、病院薬剤部の要職に就かれる場合には必ず学位が必要な時代が到来することが予想されます。従いまして、学生の皆さんは、是非とも学部6年修了後に大学院に進学し、ファーマシスト・サイエンティストをさらに究める道も考えて頂ければ幸いです。

本学の大学院は、乾学長の御指導のもと、分野の垣根を越えた大学院生の指導、英語教育の充実、リサーチアシスタント制度などによる学費・生活費のサポート、留学制度の制定など、他大学ではみられない充実した制度を設けており、きわめて優秀な大学院修了生を輩出する制度を整えています。従いまして、本学の大学院修了生は、社会に出てからも研究室のみで研究・教育指導された縦割り制度で育てられた大学院生と異なり、他流試合にも強く、国立大学をはじめとする他大学の大学院修了生を超える知識、技能ならびに考え方を有すると確信しております。

さらに、今後、大学院検討委員会では大学院講義科目の見直し、大学院講義の授業評価の実施、研究不正の防止に向けた研究倫理教育の充実及び単位化などについて議論を進めていきたいと考えており、これらなるべく早急にまとめてより良い大学院制度を構築すべく努力する所存ですので、今後とも皆様方の御協力を宜しくお願い申し上げます。



教務部長

教授 秋葉 聡

本年4月より、後藤副学長が兼任されていた教務部長の後任を務めることになりました。どうぞよろしくお願い致します。

本学は、独自のディプロマポリシーおよびカリキュラムポリシーに基づいたカリキュラムによって「ファーマシスト・サイエンティスト」の育成を目指しています。堅い書き出しとなりましたが、本学で学修し終えた学生は、薬剤師国家試験に対応できる学力はもちろん、「薬剤師として求められる基本的な10の資質」に加えて、科学的な視点からの問題発見解決能力ならびに他者への配慮を伴った態度や表現力を身につけていることを願っているのだと捉

えて下さい。ただし6年間で身につけることは膨大ですので、知識を理解し活用するためにはポイントの整理と継続的な復習が必須となることを強く認識して下さい。

しかし実際は、学修する最終目標や意識が国試の合格のみになっていませんか？さらには、定期試験の直前では「科目のポイントを見抜いた復習」ではなく「ヤマをはると称した学習内容の削減や、科目丸ごとの削減」になっていませんか？こんな意識はなくとも、共用試験や国試となると一時に多くの知識が問われるので、その準備としての統合的な整理・復習にはかなりの時間を要するだろうと気づいていると思います。でもその時期になってから「対策してほしい・対策は大学が用意するもの」と思うのでしょうか？対策と称しても整理・復習ですから、本来与えられるものではなく、自分のペースで自己責任で自律的に計画的に実行するものではないでしょうか。

「学んでいた時の継続的な復習が結果的に最も効果的で効果的な対策となるのだと初年次の頃から気づいていれば良かった」と後悔していた卒業生がいました。学修するとは、意識を変えることでもあります。学生の皆さん、どうか「今」の授業を大切に意識をもって下さい。整理・復習は自身でするものであり、ファーマシスト・サイエンティストの資質を身につけるためにも。特に4、6年次生の皆さん、

与えられることなく「今から復習」を。もしつまずいたら、学びの原点となる教科書や本学教員を頼って下さい。

教員も相互授業参観等の活動で変わろうとしています。私自身も教務部長としての意識をもつ上で、学生・職員の皆さんが本学の教育について思うことを、立ち話やメールでも聴かせて戴きましたら幸いです。



学生部長

教授 安井 裕之

本年4月より秋葉 聡先生の後任として学生部長を務めることになりました。学生部（学生部委員の教員、学生課事務職員）の方々とともに任を果たしてまいりますので、よろしくお願いいたします。

学生部の役割については学生便覧に詳しく書かれていることでもありますので、私から京薬生の皆さんにメッセージをお伝えすることで就任の挨拶に代えたいと存じます。

私が高校生のときに「学ぶ目的とは何ですか」と担任の先生に聞いたことを憶えています。今では私の方が学生さんから聞かれる立場になりました。そこで、原点に立ち返ってみて、学問とはそもそも何から始まったかについて一緒に考えてみましょう。

古代において、人が集まって共同体が形成されると小さな社会が成り立ちます。その共同体で皆が生きていくために必要なものとして「学ぶ」という行為が自然に発生してきたのでしょう。そもそもの発端はここにあった訳ですから、学問をする意味とは、自ずとその延長線上にあるはずです。一例として、ふぐを食べるときに卵巣を食べたら毒で死ぬということが今では分かっているから食べません。そういった知識が現代までずっと繋がってきているという事実は、先人達が記録を後世にきちんと残してくれてお陰なのです。学問の原点は正にここにあると思います。学問の中でも教育学というのは、やはり昔の人の智慧、知識を深めて後世に伝えていくもの。昔なら智慧のある村長や年長者が教え、皆がそれを広めて伝えていきました。これはとても大切な行為なのです。このように正確な記録を残して、システムとして練り上げたものが、村、地域社会、国家の教育の原点となっているのです。

また、人が集まると争いごとはどうしても避けられません。そこで公正に裁くためにはどうしたらいいのか。法学における法律の基本というのは大昔の地域社会で既に形成されています。さらには、教

育、法学の他に宗教があります。人は必ずこの世から亡くなっていきます。その先人たちを心から敬い、生きている人と亡くなっている人を精神的に結びつけるために祈りや埋葬などの行為をする。これが宗教です。

それ以外に何が重要であるかと言えば、人が亡くなる前の話、つまり医学です。教育、法学、宗教、医学というのが、大昔から発生した学問の体系としてどこの国にもその後に発展してきた歴史があります。その医学の中から、もちろん昔は医学と薬学は一緒でしたが、一部の内容が発展してきて薬学になりました。そして現在では、チーム医療として相互の内容が発展、融合していく過程で、再び近づき合ってきたのです。元来より医学と薬学は別れるはずの学問ではなかったのでしょうか。医学や薬学にとって、学問としてそもそもの派生した経緯やアウトプットの向かう先は、結局のところ「自分自身ではなくて周りの地域社会、すなわち共同体・コミュニティに大きく係わっている」からです。それを十分に考慮した上で「薬学生である貴君・貴女が自分の人生を学ぶことに懸ける気持ちがありますか」という命題が問われます。回りまわって自分のためになるかもしれませんが、「学ぶ」という行為は本来から周りのため（社会的共通資本）にあるのですから。

学ぶための目的意識を「自分の人生を豊かにするため」とするのであれば、お金などの経済的なものではなくて、「生きがい」を目的にするべきではないかと思います。今を生きて次世代に、そして社会に何を残すのか。未来の子供達から地球の資源を預って私達は生きているという事実を先人（先輩）から後進（後輩）へと伝えていくときに自分は一体何ができるのか。こういった人としての「志」を、学び始める前に最初にじっくりと考えてみてください。

いくつもある進むべき道の中で自分の進路として薬学を選び、この京都薬科大学でしっかりと学んだ上で、立派な社会人として働いて行こうとする京薬生の皆さん、貴君・貴女の「志」さえ間違っていなければ、とてもやり甲斐のある人生を生き抜いていくことが出来るでしょう。悠然とした心持ちで私は強く確信しています。

—学問は自分の周りのためにある。—



進路支援部長

教授 西口 工司

本年度、進路支援部長を拝命することになり、進路支援課の業務にかかわらせて頂くのは3年目であります。一昨年、昨年に続いて、さらに奮励努力いたす所存ですので、何卒よろしくお願い申し上げます。

さて、本学を卒業された学生諸君は、製薬企業、病院、薬局、公務員などへ就職、あるいは大学院へ進学されるなど、その進路は多岐に渡っています。学生諸君が卒業後の進路について考える際に有益な情報やアドバイスを提供するなど、その活動を全面的にサポートすることが進路支援課の役割です。多様な就職希望職種、あるいは就職活動時期の変更など、学生諸君の指向や社会情勢は常に変化しています。これらへの対応も含めて、本学で提供している具体的な進路支援活動は、今年度から学生諸君の全員に配布している冊子『2015夢の実現に向けて

キャリア支援プログラム』の内容をご覧いただければ、進路決定や就職活動に対して手厚く準備されたサポート体制を理解していただけるはずです。特に、創立130年という伝統の強みを生かし、社会で活躍する卒業生と意見交換できる企画を多く提供していますので、是非とも積極的に活用していただけることを期待しています。

学生諸君の6年間を通じた薬学の学びの中で重要なことは、早い時期に「なりたい自分」や「自分の将来の夢」に気づくことです。そのために、常に自分の将来について、例えば「自分は将来何をしたいのか?」、「自分にはどのような進路が向いているのか?」など、自己に問いかけることを忘れないでください。そうすれば、今やるべきことや進むべき道は、おのずから見えてくるはずです。進路について悩みや迷いがある時は、ぜひとも進路支援課を訪れて職員に相談してください。

すべての学生諸君が、自己の将来を考えながら大学生活を大いに楽しめるとともに、夢の実現に向け、高い志を持って希望する進路に進まれることを全力で応援します。

昇任のご挨拶



基礎科学系
一般教育分野

教授 野崎 亜紀子

平成27年4月1日付で基礎科学系一般教育分野、教授に昇任させて頂きました。

私は、平成7年千葉大学法経学部法学科を卒業後、同大学院修士課程、同博士課程を修了して博士（法学）の学位を得た後、日本学術振興会特別研究員、広島市立大学国際学部講師、同准教授を経て、平成25年4月に本学基礎科学系一般教育分野准教授として着任し、本学で3年目を迎えました。

私は法哲学という学問を専門としています。法は

社会の秩序の維持と密接に関わる分野です。近時医療の領域では、医療・医科学研究に対する規律の作成とその遵守が求められ、様々なルールが作られています。医療の担い手である専門家集団には今、専門的知見に基づき自らあるべき医療人の姿を示すことが求められています。このことは専門家として問題を発見する目を養い、社会に向かって発信し、必要なルールを専門家集団が自ら作り、そして自ら等の実践の帰結に責任を負うことを意味します。このことを支える思考方法は、法的思考（リーガルマインド）と重複するところが多いものです。

私は学生諸君にリーガルマインドを育てて貰いたいと考えています。精一杯、教育と研究に尽力して参ります。よろしくお願いします。



薬学教育系
教育研究総合センター
情報処理教育研究センター

教授 藤原 洋一

本年4月1日付で教授に昇任させていただきました。私は本学大学院修士課程を修了後、薬品化学教室（現 薬品化学分野）の助手となり、木曾良明教授（現 長浜バイオ大学 客員教授）のご指導の下で、約12年間、「血圧調節系関連ペプチドの化学合成の

方法論の開発ならびにその構造活性相関」について研究を行ってきました。その後、2000年1月より教育研究センター（現 教育研究総合センター）情報処理教育研究部門（現 情報処理教育研究センター）へ異動となり、現在に至るまで、情報基盤の面では学内ネットワーク、各種サーバ類、演習室などの再構築およびその運用・管理を、教育の面ではPCを用いた演習を中心に情報科目の授業を、石川誠司講師とともに担当させていただいています。当センターでは「薬学生として現在必要な“情報活用能力”は?“情報倫理”は?’’ということを常に念頭に置き、

卒業後の活躍が想定される現場を意識しつつ、学生を社会に送り出していければと考えております。

最後になりましたが、本学の目指す薬学教育・研

究に微力ながらも貢献していきたいと思っています。今後ともよろしくご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



生命薬科学系
病態生理学分野

准教授 高田 和幸

平成27年4月1日付で准教授に昇任させていただきました。私は、平成11年に本学卒業後、谷口隆之教授（現 本学名誉教授、生涯教育センター長）、北村佳久准教授（現 立命館大学薬学部教授）のご指導の下、平成17年に博士（薬学）号を取得、研究員を経て、平成18年より病態生理学分野助手（翌年助教）として、学部・大学院における生理学、先端薬理学概論、病態生理学特論、薬理学実習に携わって参り

ました。平成24年4月からは芦原英司教授のご指導の下、教育・研究に取り組んでおります。現在、シンガポールへの留学の機会をいただき、iPS細胞の脳疾患応用に向けた研究に従事しております。

さて、少子高齢化が日本の国力維持・発展に大きな歯止めとなっておりますが、アルツハイマー病は、この人口問題に直結する深刻な問題です。私は研究テーマに「アルツハイマー病の克服」を掲げ、学生諸氏と研究に取り組んでいます。また、近年、ますます国際化が求められておりますが、現在の経験を少しでも多く還元し、国際社会で活躍できる次世代の人財育成にも不惜身命取り組みたいと存じます。今後とも皆様方のご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



基礎科学系
一般教育分野

たかし
准教授 坂本 尚志

2015年4月1日付で一般教育分野の准教授に昇任させていただきました。私は、1999年京都大学文学部を卒業しました。同大学院博士前期課程を修了後、2001年にボルドー第三大学（フランス）に留学し、2011年3月に同大学で哲学博士号を取得しました。2011年10月に京都大学高等教育研究開発推進センターに採用され、高等教育に関する研究・開発業務に従事いたしました。2013年4月に京都薬科大学に講師として着任し、フランス語、哲学倫理学、人間

学、科学史、文化論、基礎演習、薬学教養などの科目を担当してまいりました。

京都薬科大学での2年間の教育活動において、学生たちが幅広い教養を身に付けることがいかに重要であるかということを実感しております。しかも、知識を学ぶだけではなく、それがどのような形で活用できるのかについても学ぶ必要があります。優れた人間性を持った医療人養成のためには、こうした訓練が初年次から継続して行われるべきであると考え、積極的に学生の意見を取り上げる双方向型の授業を目指してきました。今後も優れた医療人、社会人として学生が育つための基礎を築く教育を続ける所存です。皆様のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



生命薬科学系
衛生化学分野

講師 西田 健太郎

平成27年4月1日付で衛生化学分野の講師に昇任させていただきました。私は、本学衛生化学分野で藤本貞毅教授（現 本学名誉教授）、長澤一樹講師（現教授）のご指導の下、平成14年に本学を卒業し、平成16年に本学修士課程を修了いたしました。その後、宮崎大学医学部附属病院薬剤部で勤務の後、平成20年に鹿児島大学大学院医歯学総合研究科博士課程を修了し、同年10月より、本学衛生化学分野 助教として教育・研究に携わって参りました。

衛生化学は、“生命を衛（まもる）ための化学”

であります。現在、私は医薬品の副作用に関する研究、具体的には、抗がん剤による味覚障害及び末梢神経障害発症機序の解明とその治療薬の探索に関する研究に従事しており、学生・大学院生とともに日夜研究に励んでおります。また、教育については、「生命科学」、「栄養化学」、「栄養化学実習」及びリメディアル教育の一部を担当しており、将来、薬剤師の素養として生かされることを意識して教育指導しております。

最後に、知識・技能、問題解決能力及びコミュニケーション能力を兼ね備えた京都薬科大学の卒業生が薬に関わるあらゆる分野においてもリーダー的立場で活躍し、国民の健康増進に貢献できるよう、微力ながら邁進していく所存であります。今後とも、皆様のご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



薬学教育系
教育研究総合センター
薬学教育研究センター

講師 開 章宏

本年4月1日付で薬学教育研究センターの講師に昇任させていただきました。私は本学を卒業後、本学大学院博士課程を修了し、平成10年より本学旧細胞工学研究部門（金在萬教授）の助手として教育・研究活動に携わってまいりました。その後、薬学教育研究センター（井上武久教授）および旧分子生体制御教室（大和田幸嗣教授）に配属となり、平成22年4月から薬学教育研究センターにて細井信造教授のも

と学部学生の教育に従事しております。

最近の薬剤師国家試験は、思考力や読解力を求める問題、実験データを読み解く問題など、本質を理解しているかを問う問題が増えており、医療人として状況に応じて複合的に考えられる能力を見極める試験へと変わってきています。学生の皆さんは国家試験だけに照準を合わせるのではなく、普段からしっかりと学習習慣を身につけ、日々の講義、演習、実習、そして卒業研究に主体的に取り組む姿勢を大切にして下さい。それによって医療人としての必要な資質が養われていきます。目標の実現に向けて頑張る学生の皆さんを精一杯後押しさせていただきます。今後とも皆様方の御指導、御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

新任のご挨拶



分析薬科学系
代謝分析学分野

准教授 木村 寛之

平成27年4月1日付で、代謝分析学分野の准教授に就任いたしました。私は平成15年に本学の修士課程を修了し、平成18年に京都大学大学院薬学研究博士課程を修了、学位を取得しました。その後、京都大学産学官連携研究員、京都大学大学院薬学研究科特定助教、京都大学放射性同位元素総合センター助教として、放射化学・放射線医薬品学、分子イメージング学、創薬化学を基盤とした創薬研究と教育に取

り組んでまいりました。

今、グローバル化する社会にあって、国際通用性を備えた、質の高い教育をする事が強く求められております。私のこれまでの研究経験を土台にして、分析化学関連の講義・実習を進めてまいりたいと思っております。さらに、生体分子イメージングの研究活動を通じて、医療人としての使命感と倫理感を感じさせて、高度な薬学の知識を身につけた薬剤師、薬学領域を中心に国際的にも幅広く活躍できる教育・研究者の育成をしたいと考えております。

京都薬科大学の教職員の皆様、同窓生の皆様のご指導を仰ぎながら、微力ではありますが本学に貢献させていただきたいと念じております。何卒よろしくお願い申し上げます。

News 京薬会だより

<2015年度 京薬会代議員総会の開催>

2015年度京薬会代議員総会を5月23日（土）に開催しました。

午前中には支部長による支部長会、そして午後には代議員総会が開かれました。支部長会に於いては各支部長の自己紹介に引き続き、現在の京薬会ならびに支部活動の活性化、その他京薬会活動のさまざまな話題について、各支部長の意見集約とともに活発な議論が交わされました。

また、午後から全国から集まった支部ならびに年次代議員により2015年度代議員総会が開催されました。この中では、2014年度事業報告、2014年度決算、そして、2015年度事業計画ならびに予算案が諮られ、いず

れも承認されました。また、同窓会としての卒業生のための活動、支部の活性化についての計画を立ち上げつつあることが紹介され、総会を終了しました。

<ホームカミングデー開催予定>

本年度ホームカミングデーは昨年と同様京都薬科大学学園祭「京薬祭」の開催に合わせて11月1日（日）に開催します。本年はオープンキャンパスとの同日開催となりますのでホームカミングデーは午後からの開催となります。スケジュールは追ってお知らせしますので多数の卒業生の皆さんの里帰りをお待ちしております。

授業改善に向けた取り組み

—授業評価アンケート改訂と教員間の授業参観

1970年代に大学・大学院で学んだ私たちの時代に比べると、大学での教育のあり方はすっかり変わってきています。とくに、21世紀にはいって、大学をめぐる国際的・国内的な環境の変化、たとえばグローバル化、社会の少子高齢化、「大学全入時代」への突入、学問・研究の複雑化・高度化・専門化、パソコンやタブレットさらには携帯・スマホの急速な普及、などなどが大学での教育・学びのあり方に不断の改善・改革を促しています。

こうした時代状況のなかにあって、「教える側」も「学ぶ側」も、常に自らの本分に思いを致し、これからの世代のためにもたゆまぬ努力を惜しまないことが必要なのではないでしょうか。

本学では、上記の趣旨から授業改善に資することを目的として、授業アンケートを実施してきましたが、2015年度よりは新たな観点から質問項目等を改めました。また、昨年度より教員間での授業参観を実施しはじめました。今回の特集は、こうした「授業改善に向けた取り組み」を紹介します。

KPU_{NEWS}編集委員長 鈴木 栄樹

Feature article.

京都薬科大学では授業改善のためのさまざまな試みを行っています。本特集では、今年度より実施する新授業評価アンケートの内容と、昨年度より実施している教員間の授業参観について紹介します。

■ 授業評価アンケート改訂

【改訂の経緯】

中央教育審議会の答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」（2012年8月28日）において、高等教育の使命として「生涯学び続け、主体的に考える力」の育成が明確に示されました。薬学系人材育成においても、生涯にわたる自己研鑽は10の資質のひとつに位置付けられています。これらからも明らかなように、学生が主体的に学び続ける姿勢を身に付けるための支援を行うことが大学の責務として求められています。

高等教育に求められているこうした要請に対応し、学生の学びを促す教育を一層推進するために、今回授業評価アンケートの改訂を行うこととなりました。2009年以来実施されている、現行の授業評価アンケートは、主に教員の教授内容・方法に焦点を当てたものでした。しかし、現在の高等教育においては、学生がいかに学んだか、そして学習した知識をいかに他の知識と結び付け、多様な文脈において

活用できるかが問われています。こうした学生の「学び」の側面を授業評価アンケートによって可視化し、それを授業改善に活かすことが、本学の教育の一層の発展に資するものであると考えられます。

このような趣旨から、授業評価アンケートにおいて、「学び」に関する設問を増やし、学生が、授業における自分自身の学びについて省察する機会を Semester毎に持たせることとしました。また、この改訂によって、授業・コースのデザインを学生の学びという視点から改善するための資料として授業評価アンケートを利用する可能性も視野に入れています。

また、授業評価アンケートの質問項目は、大学そして教員が「よい授業」をどのように理解しているかを学生に伝える手段としても機能しています。その意味において、主体的な学びを強調するアンケート改訂は、教育実践の効果測定のみならず、それ自体が教育効果を持つと考えることができるでしょう。

【改訂の内容】

新授業評価アンケートの質問項目は以下の通りです。

1. 上記教員のこの授業について（すべて5段階評価）
 - (1) 授業の到達目標は明確に示されていた。
 - (2) 説明の仕方がていねいでわかりやすかった。
 - (3) 教材や説明資料は適切でわかりやすかった。
 - (4) 私語や態度の悪い学生に注意するなど、円滑に授業が行われるように配慮されていた。
 - (5) 授業内容に対する関心を高める工夫がなされていた。
 - (6) 学生の質問や発言を促す工夫がなされていた。

2. この授業でのあなたの学びについて（すべて5段階評価）
- (1) この授業の出席率を教えてください。（100%、90%程度、80%程度、70%程度、60%以下の5段階）
 - (2) 授業外学習をするなど、この授業に対して意欲的に取り組んだ。
また、授業が円滑に進行できるよう、私語や居眠りをせず集中して受講した。
 - (3) シラバス等により、授業内容や到達目標を事前に確認して講義にのぞんだ。
 - (4) 授業の到達目標を達成できた。
 - (5) 授業で学んだことで興味・関心が高まり、これからもより深く学びたいと思った。
 - (6) 質問や議論等により、教員や他の学生と積極的にコミュニケーションをとった。
3. 総合評価
- (1) 上記の質問をふまえて、この授業を総合的に評価してください。（10段階）
 - (2) この授業で良いと思ったことがあれば書いてください。
 - (3) この授業で改善が必要だと思ったことがあれば書いてください。

旧授業評価アンケートからの変更点は以下の通りです。

- (1) 質問カテゴリーを「1. あなたの授業に取り組む姿勢について」「2. 上記教員のこの授業について」「3. 総合評価」から、「1. 上記教員のこの授業について」「2. この授業でのあなたの学びについて」「3. 総合評価」へと変更しました。
- (2) 従来の教授法に関する質問内容のうち、教材や説明方法など重複する内容の質問を整理した。また、学びに関する質問を学生の学びのカテゴリーに移動しました。
- (3) 質問数は「教授法」カテゴリーが6問、「学び」カテゴリーが6問、「総合評価」カテゴリーが3問であり、総質問数は15問となりました。現行アンケートの設問数は16問であるので、1問減となりました。
- (4) 学びに関する質問では、授業外学習、シラバスの事前確認、到達目標の達成、授業内容への興味・関心と今後の主体的学び、教員・学生とのコミュニケーション等の項目を設けました。

【実施方法】

- (1) 基本的に従来通り全授業・全教員を対象に実施しています。
- (2) また、授業改善のための信頼性ある資料とするために、回収率の一層の向上のためにより効率的な方策を検討しています。
- (3) 従来通り、アンケート集計結果は、前後期ともに担当教員にフィードバックされます。担当教員はその結果をもとに、授業について振り返り、授業改善に役立てるための「リフレクション・ペーパー」を作成し、提出します。全教員のリフレクション・ペーパーは、アンケートの統計的解析結果とともに、冊子としてまとめられ、図書館において公開されています。

■ 教員間の授業参観

【導入の経緯】

授業改善の取り組みとして、これまで「学生による授業評価アンケート」を実施し、教員は改善点をリフレクション・ペーパーにまとめて、授業改善につなげてきました。

一方、6年制薬学教育が始まると同時に、1科目を複数の教員で担当するオムニバス形式の講義が増加しました。

また、2015年から導入された改訂版薬学教育モデ

ルコアカリキュラムでは、順次性のあるラセン型カリキュラムの導入が求められ、ラセンの各階層に相応しい授業遂行のため、不断のチェック（評価）と、それに対応した改善が必要となりました。このため、各担当者による授業改善と、カリキュラムや講義科目の改善が必要となったわけです。

この課題を解決する手段のひとつとして、教員間の授業参観を導入しました。

【導入の経過】

2013年 4月 教授会 教授法の改善、領域間およびオムニバス担当者での連携推進につながるため、教員の了承のもと参観を行うことを承認。

2013年10月 教務部委員会 FD活動（教授法の改善）活性化の方針決定。

2013年11月 教務部委員会 授業改善のためのPDCA（計画→実行→評価→改善）サイクルのチェック機能の一部として授業参観を導入することを決定。

2013年12月～2014年1月 教務部委員会 教務部委員間で授業参観実施。

2014年2月 教務部委員会 授業参観の評価。
2014年3月 教授会 2014年度授業参観実施要項を承認。
2014年4月 本格実施。

2014年度は、①授業参観教員および授業担当教員の双方の授業改善に役立てる、②担当領域および他の領域の授業内容を把握して、大学全体でより良いカリキュラムを構築することを目的に実施しました。

【実施方法】

参観希望者は、授業担当者に事前了解を得る（担当者から依頼しても良い）。参観後は、参観者と授業担当で意見交換もしくは、報告書を参観者から授業担当者に送付することになっています。

【実施状況】

前期：120科目

後期：62科目（教員数：96名）

教務課に提出された報告書をベースに集計しています。実数はこれより多い可能性があります。

【アンケート】

次の内容で教員に対してアンケートを実施し、50名から回答がありました。

《参観者》

- 【1】前・後期に参観した合計回数を教えてください。→0の場合は【5】へ
- 【2】授業参観をして、良かったことがあれば、具体的に教えてください。
- 【3】授業参観をして、良くなかったことがあれば、具体的に教えてください。
- 【4】他の教育職員に参観を薦めたいと思う授業担当者がいれば教えてください。
- 【5】授業参観をしなかった理由を教えてください。

《授業担当者》

- 【1】前・後期に授業参観を受けた合計回数を教えてください。→0の場合は《自由記述欄》へ
- 【2】参観を受けて、良かったことがあれば、具体的に教えてください。
- 【3】参観を受けて、良くなかったことがあれば、具体的に教えてください。
- 【4】参観者から、授業に関するフィードバックはありましたか。
- 【5】参観者からのフィードバックを授業改善につなげることができましたか。
- 【6】具体的に実施した改善点を教えてください。

《自由記述》

【アンケート結果】

《参観者》

- 【1】前・後期に参観した合計回数を教えてください。

参観回数	0回	1回	2回	3回	4回	5回	6回	20回
回答者数	6名	7名	10名	8名	9名	6名	3名	1名

《まとめ》

参観回数は、各期において2から3回実施するよう連絡していましたが、そのとおりの結果が出ていると思います。0回の教員については、授業担当科目がない場合や着任時期の都合で時間が取れなかったことが原因だったようです。

授業参観をして良かったこととして、主に次の4点のような意見があげられていました。
なお、良くなかったことについての意見は、特にありませんでした。

- ①機器やプリントの使用方法やアクティブ・ラーニングを大人数講義で取り入れるための工夫等
授業方法に関すること
- ②授業を受けている学生の反応や受講態度が良かったこと
- ③同一科目内での内容の重複などが確認できたこと
- ④他の教員と比較できたこと

《授業担当者》

【1】前・後期に授業参観を受けた合計回数を教えてください。

被参観回数	0回	1回	2回	3回	4回	5回
回答者数	12名	7名	5名	8名	5名	3名
	6回	7回	8回	9回	10回	20回
	3名	1名	0名	1名	1名	1名

【5】参観者からのフィードバックを授業改善につなげることができましたか。

できた	できなかった	その他
22名	5名	3名

くまとめ>

参観者からのフィードバックを授業改善につなげられなかった教員についても、参観日が担当する最終回だった等の理由でした。フィードバックによって学生の受講態度が分かって良かったという意見が授業担当者からもありました。客観的な意見や学生による授業評価アンケートとは異なる視点からのアドバイスによって、改善点が明確になったとの意見もありました。

【今後の展開】

アンケート結果から、教員間の授業参観は授業改善に有効な手段であると判明しました。今後も継続して実施したいと思います。

自由記述欄には、少数ですが改善点も挙げられていましたので、今後、教員間の授業参観がより多く実施されるよう改善に努めたいと思います。

全学的に授業参観を実施している事例は、全国的にも珍しいものです。今後、授業参観をした後に立場など無関係に授業改善について気軽に話し合うような雰囲気が、醸成されることを期待しています。

私の薦める、私の一冊 Column

情報処理教育研究センター 教授 藤原 洋一

岸見一郎・古賀史健 著『嫌われる勇氣』
ダイヤモンド社(2013)

“すべての悩みは対人関係の悩みである”、“世界はシンプルであり、人生もまたシンプルである”、“トラウマを否定せよ”、“他者の課題を切り捨てよ”、“叱ってはいけない、ほめてもいけない”、“いま、ここを真剣に生きる”など、いずれも本書に登場する言葉の数々です。

「アドラー心理学」を皆さんはご存じでしょうか？ 恥ずかしながら本書を読むまで、ジークムント・フロイト(1856-1939)、カール・グスタフ・ユング(1875-1961)といった心理学の巨匠とは異なり、アルフレッド・アドラー(1870-1937)の存在を私は全く知りませんでした。

本書は「アドラー心理学」を私のような門外漢が理解しやすいように、その思想を「青年と哲人の対話」という形式を用いてまとめられています。そのおかげで通常の心理学書のような理論や専門用語を理解しなければ先へと進めないといったことはなく、最後まで飽きずに読むことができます。

さて、肝心の内容についてですが、1)人のすべての悩みは対人関係の悩みであり、そのゴールは「共同体感覚」である、2)人生の主役は自分自身である、3)人の行動には目的がある(目的論)、4)人はこれ以上分割できない最小単位であり、全体として考える(全体論)、5)人は自分の主観的な世界に住んでいる(認知論)、などが挙げられます。また、“アドラーの考え方が理解できるようになるためには、その人の人生の半分くらいはかかる”ことから、学生の皆さんはともかく、私などは今から20数年かかる計算となり、すべてをすぐに理解できないのは当然なのかもしれません(うまくできています!)。「アドラー心理学」にもう少し触れてみたいという方には小倉広 著の『アルフレッド・アドラー 人生に革命が起きる100の言葉』ダイヤモンド社(2014)をあわせて紹介します。

※本書は入荷次第、図書館内の本誌推薦書コーナーに展示いたします。



授業評価検討委員会

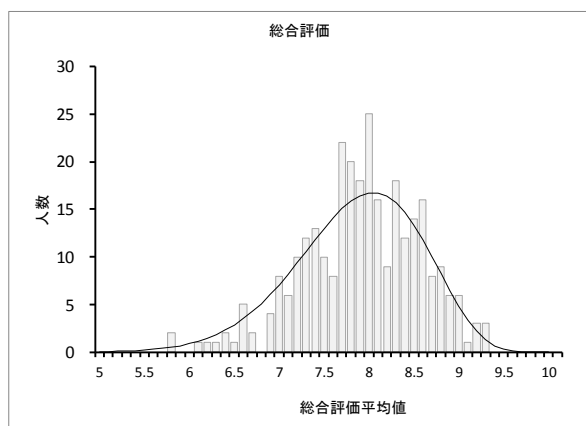
本学では、授業の改善を目的とした学生による授業評価をセメスター毎に実施しています。授業評価の方法として、2002年度から「授業アンケート」を行い、2009年度以降、全学生を対象に実施しています。評価対象となる教員は専任教員および非常勤講師です。

本アンケートの集計結果を受けて、学生の意見に対するフィードバックのために「リフレクション・ペーパー」を作成しています。全教員のリフレクション・ペーパーは冊子体にして図書館で公開し、閲覧ができるようにしています。これにより、今後の授業改善が積極的に進み、教員および学生にとって有意義な授業が実施されることを期待します。2014年度授業評価の集計結果と解析結果の概要を以下のとおり報告します。

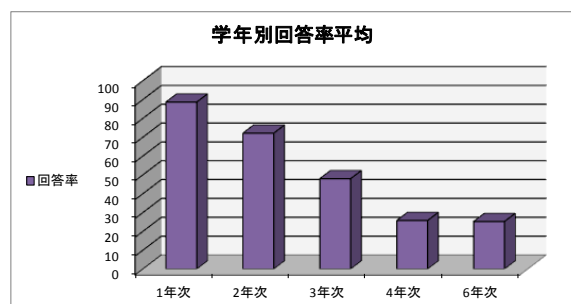
◆設問項目別授業評価の全体平均は下表のとおりであった。

設 問	2013年度	2014年度
	評 価 (5段階)	評 価 (5段階)
Q01.話し方が明瞭で聞き取りやすかった。	4.2	4.2
Q02.説明がいてねいでわかりやすかった。	4.1	4.2
Q03.板書、液晶プロジェクターなどが適切でわかりやすかった。	4.0	4.1
Q04.教科書・参考書やプリントなどの教材が適切に使用されていた。	4.2	4.2
Q05.授業がシラバスに沿って進められた。	4.2	4.2
Q06.重要事項を強調して説明していた。	4.1	4.1
Q07.よく準備され、熱意が感じられた。	4.2	4.2
Q08.私語や態度の悪い学生に注意するなど、静かに授業が行われるように工夫されていた。	4.0	4.1
Q09.授業に対する関心を高める工夫がなされていた。	4.1	4.1
Q10.この授業内容に興味を持つようになった。	4.0	4.0
Q11.教員は学生の質問や意見に対して適切に対応した。	4.1	4.1

◆教員個人別の総合評価の分布は、平均値7.88であった。

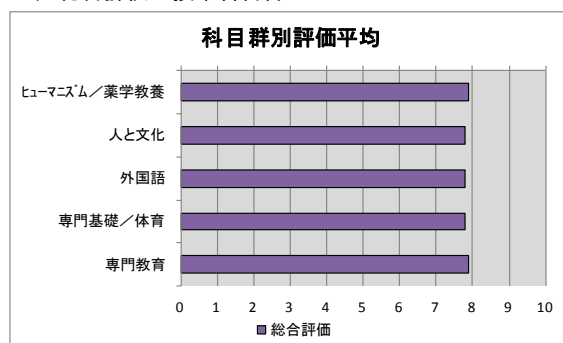


◆学年ごとのアンケート回答率では、学年が上がるにつれて回答率平均が顕著に減少した。

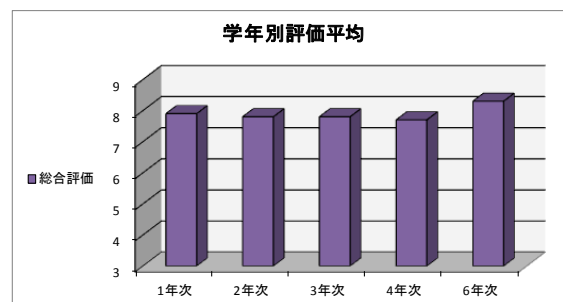


◆総合評価と授業科目群、学年および職位で有意な差は見られなかった。

1) 総合評価と授業科目群



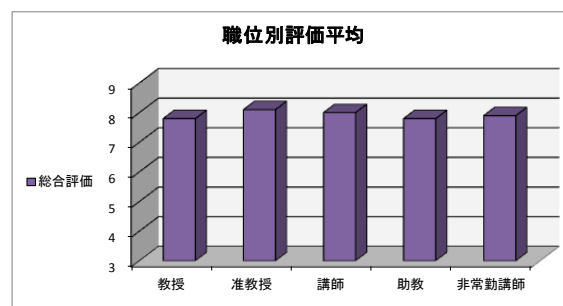
2) 総合評価と学年



※1～3年次は「新カリキュラム」に移行。

※5年次に授業評価アンケート対象科目はありません。

3) 総合評価と職位



最後に、授業アンケートに協力してくれた学生諸君に感謝するとともに、授業改善のために、アンケートの回答率の向上を目指したいと思います。授業アンケートは今後も継続して実施しますので、回答への協力をお願いします。

また、評価対象となった教員におかれましては、アンケート結果を参考にされ、更なる授業改善に役立てていただければ幸いです。

2015年4月30日（木）、京都薬科大学・躬行館T31講義室において第6回KPUシンポジウムを開催いたしました。特別講演として福井大学医学部附属病院・薬剤部の矢野良一先生ならびにアステラス製薬株式会社・薬物動態研究所所長の田端健司先生をお招きして、それぞれ「探究心を持ち日々臨もう！ 病院薬剤師として皆さんに伝えたいこと」および「製薬会社における創薬動態研究者の役割」という演題でご講演頂きました。また、一般講演として上野嘉夫教授、栄田敏之教授、岩崎宏樹助教、藤井正徳准教授および演進講師の5名の学内教員による最新の研究成果について発表して頂きました。合計445名の多くの学生や教員の方々にご参加くださいました。今回は特に、1年次生および2年次生の参加者が多かったのが特徴です。また、シンポジウム終了後に開催した交流会では、多くの学部学生が特別講演演者の矢野先生や田端先生、また一般講演演者の先生方を囲んで質問をしており、18時30分頃まで活発な討論が続きました。今回も座長先生方をはじめ多くの先生方からの多大なご協力を頂きましたことを深謝致しますとともに、今後とも引き続きご協力頂きますようお願い申し上げます。

KPUシンポジウム実行委員会一同

■ シンポジウムにおける講演および茶話会の様子



福井大学医学部附属病院 矢野 良一 先生



アステラス製薬 田端 健司 先生



講演会場



乾 賢一 学長



上野 嘉夫 教授



栄田 敏之 教授



岩崎 宏樹 助教



藤井 正徳 准教授



演 進 講師



KPUシンポジウム委員長
安井 裕之 教授



茶話会

■ シンポジウム概要

日時：2015年4月30日（木）13:30～17:10

場所：京都薬科大学躬学館 T31講義室

開会の挨拶

乾 賢一 学長

特別講演（1）13時40分～14時20分（座長：中村 暢彦 講師）

「探究心を持ち日々の臨もう！病院薬剤師として皆さんに伝えたいこと」

福井大学医学部附属病院 薬剤部
主任薬剤師 矢野 良一 先生

特別講演（2）14時20分～15時00分（座長：伊藤 由佳子 講師）

「製薬会社における創薬動態研究者の役割」

アステラス製薬 薬物動態研究所
所長 田端 健司 先生

一般講演（1）15時15分～15時40分（座長：有本 収 教授）

「どこにでも見つかる数学 ―学校数学から外の世界へ―」

上野 嘉夫 教授（数学分野）

一般講演（2）15時40分～16時05分（座長：坂根 稔康 准教授）

「良質な薬物治療を提供するために」

栄田 敏之 教授（薬物動態学分野）

一般講演（3）16時10分～16時30分（座長：中村 誠宏 准教授）

「ヨウ化サマリウム(SmI₂)を用いた新規反応の開発」

岩崎 宏樹 助教（薬品製造学分野）

一般講演（4）16時30分～16時50分（座長：天ヶ瀬 紀久子 講師）

「アトピー性皮膚炎モデルマウスの開発とその解析」

藤井 正徳 准教授（薬理学分野）

一般講演（5）16時50分～17時10分（座長：武上 茂彦 准教授）

「ビタミンE誘導体の多面的な抗がん効果」

濱 進 講師（薬品物理化学分野）

閉会の挨拶

KPUシンポジウム委員長 安井 裕之 教授

茶話会

17時20分～18時30分



開館日程

図書館

2015年 7月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

2015年 8月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

2015年 9月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30			

8:30～21:00

8:30～17:00

10:00～17:00

休館

休館=館内整備

フォン・フーワー（薬学英语分野教授）・樋口 裕城（京都薬科大学2015年3月卒業生）
坂野 晴朗（6年次生）・島 恭平（3年次生）・八木 貴大（2年次生）

昨年8月、私と上記学生4名はマレーシアのペナン島にあるマレーシア科学大学、University of Science Malaysia (USM；マレー語でUniversiti Sains Malaysia) のご協力のもと、化粧品学実習と薬局見学に参加いたしました。以下、これらの概要と各学生の感想等を紹介します。

■ ペナン島内の薬局見学

8月13日には、ペナン島内の薬局を訪問し、現地の薬剤師業務について学ぶことが出来ました。2つのグループに別れ、異なる薬局を見学しましたので、それぞれのグループの体験や感想、得られた知見を紹介します。また、その後、USM内の薬局も見学させて頂き、薬剤師の先生とディスカッションをする機会を与えていただきました。

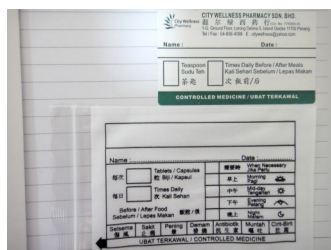
1) City Wellness Pharmacy 見学グループ（樋口裕城・島恭平）

マレーシアでは日本のような医薬分業は実施されておらず、業務における処方せん調剤の割合は日本より低いようです。ここでの薬剤師は日本とは異なり、薬局は小さな診療所のような形でした。問診や簡単な検査（血圧、血糖値など）に基づき、薬剤師の判断で販売することができる医薬品の区分（Group Cと呼ばれます）があり、その中には日本では医療用医薬品とされているものもあるとのことでした。また、NPと呼ばれる、日本でいう一般用医薬品のような区分の医薬品は、日本のように箱詰めされた状態ではなく、小分け包装の状態が必要数だけ販売することが一般的になっているそうです。用法用量は購入時の袋に指示されていて、服用時に自ずと目にすることができるよう

になっていました。

また、西洋医薬品だけではなく、生薬やハーブの利用にも積極的で、売場スペースも西洋医薬品と同等の面積が与えられていました。これらの異種の医薬品を組み合わせることで、西洋医薬品単独では得られない効果が得られることも多いようです。この点は日本でも見習うべきであると思います。

そして、City Wellness Pharmacyがショッピングモールで出張サービスを行ったり、実用的なダイエットプログラムを実施して患者のQOL向上に貢献している点も日本での薬剤師業務に取り込める点であったと思います。



City Wellness Pharmacyで使用されている薬袋とラベル



規制医薬品 (Controlled medicine) の医薬品棚



薬局内での検査に用いる測定機器類。日本の薬局より種類が豊富なのは？



City Wellness Pharmacyにて（左からMr. Ho Ryu Yann、フォン教授、Ms. Gina Koay Wan Lee、樋口裕城、島恭平、八木貴大）

2) Georgetown Pharmacy 見学グループ（坂野晴朗・八木貴大）

2014年8月のUSM実習の一環でペナン島のGeorgetown Pharmacyを見学しました。マレーシアの薬剤師数は8,632人であり、薬剤師1人あたりの人口は約3,355人となっています。ちなみに日本の薬剤師数は26万6500人、薬剤師1人あたりの人口は約463人です（いずれも2011年の値）。マレーシアでは医薬分業があまり進んでおらず院内調剤が多いため、見学した薬局は一般用医薬品や化粧品、サプリメント等を取り扱っており、日本のドラッグストアのような雰囲気でした。マレーシアは多民族国家であり、薬剤師の方に購入する薬の傾向に民族間で違いがあるのかを質問したところ、体

感としては食生活の違いにより中華系は消化器系疾患、インド系は糖尿病の方が多く、マレー系は特に顕著な疾患傾向はないとの回答をいただきました。マレーシアの人口に占める高齢者の割合は2012年時点で5.2%であり高齢化はまだそれほど進んでないため、薬剤師の役割も日本とは異なるものとなっています。



USM内の薬局にて、薬局についての説明を受けました。

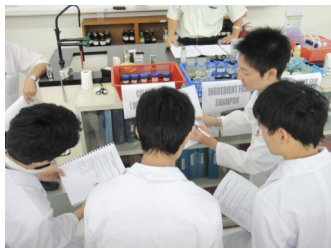
■ USMでの化粧品学実習

8月14、15日には、マレーシア、ペナン島にあるUSMの薬学部にて化粧品学の実習に参加いたしました。ルー
ージュ、リップスティック、シャンプー、消臭剤、制汗剤などの製造を体験することが出来ました。

感想（八木貴大）

実習時に配布された実習書には一定の処方が記載されているものの、実際には処方書を自らアレンジし、見本とは異なるものを作ることができ、興味深い体験となりました。私自身、まだ英語でのコミュニケーションに慣れていないため、指導して下さったUSMの先生方との意思疎通で苦労しました。しかし、だからこそ相手の言葉を理解でき、自分の伝えたいことが伝

わったときには達成感がありました。日本ではあまり体験できないことに挑戦できたことや自分の当時の英語力を試すことができたことは、良い経験となりました。これを機に、自分の英語力を高め、より多くの人とコミュニケーションをとることができるようにしていきたいと思いました。



先輩後輩での協力



先生とのディスカッション
(左：樋口裕城、
右：Prof./Dr. Peh Kok Khiang)



実習中の風景（島恭平）



実習中の風景（Assoc. Prof./Dr.
Yvonne Tanと参加者4名）



Prof.Saringat Haji Baieによる
リップクリームについての説明



副学部長（Prof./Dr. Mohamed
Azmi Ahmad Hassali）より各参加
者に記念品と証明書をいただき
ました。
（左：Prof./Dr. Mohamed Azmi
Ahmad Hassali、右：坂野晴朗）

「第29回日本医学会総会 2015 関西」を終えて

Event

教務課

2015年4月11日(土)～13日(月)に、国立京都国際会館を中心として「第29回日本医学会総会 2015 関西」が開催されました。医療チーム学生フォーラムに本学から4名の学生が参加し、プレイベントとして2012年秋から医学、医療関係学部の間と調査、研究してきた課題について発表を行いました。

感想およびメッセージをご紹介します。

いわさだ

■ 6年次生 岩貞 有紀

全く前例がないなかで進めていく学生フォーラムでの活動は、決して平坦で楽なものではありませんでした。一から作り上げていくことの困難さを本当の意味で感じました。時には、先生方から厳しい言葉をいただき、本気でやっていけるのかと悩んだこともあります。なかには途中で辞めていった人も数多くいました。そんななかで活動を終え一番感じていることは、いただいた機会をチャンスとして受け止め、挑戦することの大切さです。

私に与えていただいた大きなチャンスとして、学生フォーラムでの活動、活動のなかの1つである医療の担

い手プロジェクトのリーダーの2つがあります。どちらもこんな大役、自分に務まるのかとても不安でしたが、実際にやり遂げることによって得た先生方や他学部との繋がり、新しい知識、経験は何事にも代えがたいものだと思います。

みなさんも残りの学生生活でたくさんのチャンスに巡り合うかと思います。そのチャンスは大きすぎて自分に務まるのか不安になるかもしれません。しかしその不安に負けずに挑戦してみてください。これが私からのメッセージです。

最後になりましたが活動に推薦して下さった先生方、協力し支えて下さった皆様本当にありがとうございました。

あきら
■ 4年次生 浅野 瑛

2012年の秋から始まった医学会総会の企画、医療チーム学生フォーラムに参加させていただきました。この企画は前例が無く本当にゼロから自分達で築き上げていく必要がありました。同じ医療系といっても、それぞれの医療に対するイメージも違い私の所属していた在宅医療班内でも意見をまとめるのが一苦勞で、繰り返し議論を重ねていました。僻地医療、事業所のグループ化、介護休業制度、24時間対応などいろいろな案がでしたが、実際に現場を見学し、現在の在宅医療に何があって何が必要なのか、またその改善案を提示することにしました。私は在宅医療に今まで縁がなくメディアを通してしか知らなかったのが貴重な体験となりました。現場では薬剤師も薬を届けるだけでなく、診療所や訪問介護ステーションとの会議に出席し薬の保管、剤形、処方日数、投与方法等を患者宅に訪れた際に得た情報をもとに提案されていました。こ

よしどめ
■ 4年次生 吉留 利香

2012年11月から約2年半に渡って活動していた「医療チーム学生フォーラム」が4月12日の医学会総会での発表をもって遂に終わりました。

1年次生から京都薬科大学の代表として学生生活の半分近くをこの活動に携わせて頂き、乾学長をはじめとした沢山の先生方、関係者の皆様方のご協力により最後までやり遂げることができたことを心からお礼申し上げます。

私は学生フォーラムの活動で、医療系学生を100人以上集めた学生イベントの運営や、実際に医療現場で働いている方々に向けた大人数の前でのプレゼンテーションなどとても貴重な実りある経験をさせていただきました。

くさかべ
■ 3年次生 日下部 葵

この医学会総会での発表に向けての活動に参加した当初、私は1年次生であることもあって時間にも余裕があるし、参加してみようかなという軽い気持ちでした。しかし、本番に向けて担当の先生方に見てもらい発表を何度も行い、これでは全然だめだということが分かり、私自身もこのままではいけないと感じ始めました。また、本番が近づくにつれて、この学生フォーラム全体の空気も変わったようでした。私の所属していた死生学会では、ホスピスなどに訪問・見学に行かせていただき、実際その患者さんへの回診に同行、また医師の方々の生の声を聞くことができました。この経験が私たちの発表の基盤となって、大きな影響をもたらしてくれました。途中、メンバー同士で意見が食い違ったり、忙しくてなかなか皆で話し合うことが

ういった連携は地域の規模に影響される傾向が強いそう、で、都心部でのモデル形成が課題になっています。本番での発表内容はここでは省略しますが、分化会活動や医療の担い手プロジェクトといった派生企画の活動で自分から積極的に動いていくことが重要なのだと感じました。また学生の中から他医療系学部と交流を通じて理解できたことで、将来の多職種連携の重要性や医療現場以外にも衛生や健康増進といった考えから医療系学部の活躍のフィールドは多岐にわたっていると思いました。何もないところからの出発は大変でしたが、その分多くの方と知り合え、様々な考えに触れることで成長を実感できた一方で、情報量の多さから紆余曲折することが多く、自分に必要な情報、アドバイスを選び抜いていくことの必要性を学びました。

普通では経験できないこの機会に参加できたこと、またご支援してくださった多くの方々、にこの場を借りて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

そしてその中で、「やりたい!」と感じたことをためらわずに実行することの大切さを実感しました。

大学生1人の力ではできないことでも、周りに発信し、仲間を集めると自分では思いもよらなかった新しいアイデアが生まれました。本気でこれをやりたいんだ、と伝えたら協力してくれる大学の先生や社会人の方々がいました。とにかく「やってみたい!」と思ったことを発信する、一歩を踏み出すことはすごく勇気がいりますが、それを実現させるとまた新しいやりたいことが必ず見つかりました。この好奇心の連鎖で、私は将来の目標ができました。それは今の私には無謀なことかもしれませんが、自分の「やりたい!」という気持ちをばねに色々なことにチャレンジしたいと考えています。

難しいこともありましたが、最終的に賞を頂くことができ、この時の感動はこれからも忘れないことだろうと思います。この学生フォーラムに参加したことで、薬学生だけでなく、医学生、看護学生、歯学部生と交流することができ、各々が所属する分科会での意見交換、また本番に向けての発表に対する率直な意見を頂き、落ち込み、悩みながらも奮闘してきました。それぞれの学部だからこそ感じる思いをぶつけ合い、本番で伝えることができ貴重な経験ができたと思います。本来ではなかなかできない医総会で発表させていただいたことで、将来医療に携わるひとりの薬学生として今後の勉学に対する姿勢が変わったことが私にとっての大きな財産となりました。是非、医療学生のみならずも他学部と交流する機会があれば積極的に参加して、互いに良い影響を受けながら楽しい大学生活を送っていただけたらと願っています。



考えるということ

村岡 元樹



1996年 学部卒業

(薬物動態学教室)

1998年 大学院修了

(薬物動態学教室)

グラクソ・スミスクライン株式会社
開発本部 パイプライン・イノベーション推進部門

プロジェクトマネジメント部 部長

私は、1998年に大学院（修士課程）を修了後、グラクソ・スミスクライン(株)にて、新規薬剤の臨床試験の企画立案・実行、いわゆる臨床開発を10年間経験し、現在は、担当範囲を医薬品開発・上市の全般とし、主にプロジェクトマネジメントを担当しています。2013年には、弊社米国事業所に一年間出向する機会もありました。職務経験を振り返ると、在学時代の経験が、まさに私の根本（根っこ）である事を再認識しました。

私は、薬物動態学教室にて、製剤開発・薬物動態について、高田寛治先生にご指導賜りました。薬効に必要な部位にのみ発揮させるために、Drug Delivery Systemを用いたアイデアを生み出すため、日々実験に没頭しました。高田先生は、学術面のみならず、社会人になるための人材育成に注力頂いたと感謝しています。例えば、毎週月曜日は、院生が複数の英語論文をレジメにまとめ、英語でのプレゼンテーション、ディスカッションを行いました。先生からの鋭いご質問にタジタジになりながらも、皆で頑張って英語で答えていました。また、先生が急

きょ外国人の方をお連れし、いきなりプレゼンの指示を頂いた事もありました。さらに、当時には珍しく学会参加のため1カ月間の米国滞在の機会を頂きました。参加条件として、全ての手配・計画立案を自分たちが行うというものであり、時には冷や汗をかきながら、1カ月の米国滞を経験しました。

日常の研究においては、実験器具が故障した場合、原因が分かるまで、購入を許可頂けませんでした。ただし、院生一人に一台のパソコン、HPLC（高速液体クロマトグラフィー）が提供され、結果を早く出すために必要な投資は惜しまれませんでした。また、委託研究など企業の方と面談する事もあり、企業がどのような観点でデータを見ているか感じる事ができました。担当研究の論文校閲についても、先生のコメントの意味を自分で考える事で、知識・思考力の成長につながったと思います。

これらの学生・院生時代の経験は、現職でのビジネスシーンに繋がるものばかりだと感じています。特に、海外も含めた広い視野をもち、自分で調べ、考える事はかけがえのない経験の一つです。

近年、ネットなど便利な時代となり、検索すればいつでも情報は得られます。企業・業界においても、業務の細分化により、全体的視野をもつ思考の機会が減ってきているのではないのでしょうか。是非、学生の皆様には、便利な時代であるからこそ自ら考え、そして担当する研究が、どのように社会・世界に影響を及ぼすものなのか、想像力・先見力を高めて頂きたいと思います。そして、ともに、患者さん及びそのご家族の皆様、社会に貢献して参りましょう。



MATCHAのススメ

薬物動態学分野 講師 伊藤 由佳子

新緑の候から初夏にかけて、新茶が出てくる時期。お茶には効能効果がいくつかあって、身体にいい、ということは何となく認識していましたが、近年、海外においてもNY（ニューヨーク）にMatchaBarがオープンするなど、海外セレブたちが積極的に摂取する美のスーパーフードとして、MATCHA（抹茶）が注目を集めているそうです。その効能効果としては、緑茶に含有されているカテキンの抗酸化作用によるアンチエ

イジング効果、ビタミンCの美肌効果、カリウムのデトックス効果、不溶性食物繊維の便秘解消効果などがあるそうです。また、緑茶カテキンには、肝切除後の早期の肝機能障害を軽減する可能性を示した(Saito, Y. et.al., J Gastroenterol. 2014 ;49(4):692-701.)、という論文も報告されるなど、改めてその有用性が見直されているところです。この日本発の“MATCHA”の魅力に、海外セレブたちも見逃すことはしなかったようですね。今後は、飲むだけではない新たなレシピが逆輸入で入ってくるかもしれません。積極的に摂取してみてください。だって、キレイでいたいものですものね。

《試験日程》

2015年度の試験日程は【表1】のとおりです。各学年とも進級・卒業要件をよく確認するようにしてください。試験日時を間違えるケースが時折見受けられます。各自注意して試験に臨んでください。

再試験の受験手続は、指定の手続期間に必ず行ってください。手続時に発行する「再試験受験許可書・領収書」は、再試験を受験する際に必要です。紛失しないように大切に保管してください。万が一紛失した場合は、再試験受験までに教務課で再発行を受けてください。

人と文化選択科目の不合格科目については、再試験手続をしなかった場合、放棄とみなします。放棄科目については、履修した年度内は平均点に算入されますが、翌年度には平均点の算出対象外となります。

シラバス「学修の手引き」の項にも、試験制度の詳細や受験にあたっての心得が掲載されていますので、よく読んでおいてください。

【表1】

年	試 験	試験期間	合格発表等	手続等
2015	1～4, 6年次生 前期試験	7月22日(水)～ 7月31日(金)	8月21日(金)に発表予定 (Web公開)	—
	2～4年次生 前年次・前々年次科目 再試験	9月1日(火)～ 9月4日(金)	成績通知書を配付	4月23日(木)・24日(金)
	1～4, 6年次生 前期科目再試験	9月7日(月)～ 9月11日(金)	成績通知書を配付	前期試験の再試験受験 手続期間: 8/24(月)・25(火)
	4年次生 薬学共用試験/OSCE本試験	12月12日(土)・13日(日)	発表・手続方法については 掲示等でお知らせします	
2016	6年次生 薬学特別演習本試験	1月7日(木)・8日(金)	1月19日(火)に発表予定 (Web公開)	—
	4年次生 後期試験	1月18日(月)～ 1月20日(水)	1月28日(木)に発表予定 (Web公開)	—
	1～3年次生 後期試験	1月20日(水)～ 1月28日(木)	2月12日(金)に発表予定 (Web公開)	—
	4年次生 薬学共用試験/CBT本試験	1月26日(火)・27日(水) ※いずれか1日を受験	発表・手続方法については 掲示等でお知らせします	
	6年次生 薬学特別演習再試験	2月4日(木)・5日(金)	卒業査定会終了後に 成績通知書を配付	薬学特別演習の再試験受験 手続期間: 1/20(水)・21(木)
	4年次生 後期科目再試験	2月5日(金)～2月10日(水)	2月17日(水)に発表予定 (Web公開)	後期試験の再試験受験 手続期間: 1/29(金)・2/1(月)
	1～3年次生 後期科目再試験	2月23日(火)～ 3月1日(火)	進級査定会終了後に 成績通知書を配付	後期試験の再試験受験 手続期間: 2/15(月)・16(火)
	4年次生 前・後期科目再試験Ⅱ			【前期科目】 再試験Ⅱ受験 手続期間: 1/29(金)・2/1(月) 【後期科目】 再試験Ⅱ受験 手続期間: 2/18(木)・19(金)
	4年次生 薬学共用試験/CBT追・再試験	3月3日(木)	発表・手続方法については 掲示等でお知らせします	
	4年次生 薬学共用試験/OSCE追・再試験	3月7日(月)		

《成績通知・合格発表日程》

【表2】の日程で成績通知書を配付します。1, 2年次生は学生相談員から、3～6年次生は分野主任から、学生証提示の上、受け取ってください。代理受取はできません。なお、成績通知書は、必ず配付期間中に受け取るようにしてください。

【表2】

区 分	年 次	配付日程	保証人(父母)への送付
前期終了時の 成績通知書	全学年	10月1日(木)～ 10月8日(木)	10月下旬
後期終了時の 成績通知書	6年次	2月16日(火)～ (卒業査定会終了後配付します)	—
	1～5年次	3月23日(水)～ (進級査定会終了後配付します)	4月中旬～下旬

2016年度の学部入学試験は、下記のとおり実施します。受験生や高校生向「大学案内」「DATA BOOK」の資料を入試課に用意しておりますので、お近くの受験生、高校生の方々にご案内下さい。

1. 入学定員・募集人員

学 部	学 科	入 学 定 員
薬学部	薬学科	360名

	特 別 選 抜 推 薦 入 学		一 般 選 抜		
	指定校制	一般公募制	一般A方式 (センター前期)	一般B方式 (一般入試)	一般C方式 (センター後期)
募集人員	50名	80名	45名	180名	5名
出願資格	高等学校長へ通知	2016年3月卒業見込者 および 2015年3月卒業者※ 評定平均値 3.2以上	2016年3月卒業見込者 および 既卒者		

※文部科学大臣が高等学校の課程と同等の課程を有するものとして認定した在外教育施設の当該課程を2015年3月修了者および2015年4月以降2016年3月末までに修了又は修了見込者を含む。＜出願資格については、それぞれの入学試験要項で確認してください＞

2. 入学試験関係日程

	推 薦 入 学		一般A方式 (センター前期)	一般B方式 (一般入試)	一般C方式 (センター後期)
	指定校制	一般公募制			
出願期間	2015年11月 2日(月) ～ 2015年11月10日(火) 必着		2016年1月 6日(水) ～ 2016年1月15日(金) 当日消印有効	2016年1月 6日(水) ～ 2016年1月22日(金) 当日消印有効	2016年2月23日(火) ～ 2016年3月 7日(月) 当日消印有効
試 験 日	2015年11月16日(月)	2015年11月21日(土)	2016年1月16日(土) 2016年1月17日(日) 個別試験はなし	2016年2月3日(水)	2016年1月16日(土) 2016年1月17日(日) 個別試験はなし
合格発表日	2015年11月30日(月)		2016年2月12日(金)	2016年2月11日(木・祝)	2016年3月15日(火)
入学手続 期 限	2015年12月18日(金) 必着 (入学金・授業料(前期分)納付期限) (入学手続書類等提出期限)		2016年2月23日(火) (入学金納付期限)	2016年2月23日(火) (入学金納付期限)	2016年3月25日(金) (入学金納付期限)
			2016年3月25日(金) 必着 (授業料(前期分)納付期限) (入学手続書類等提出期限)		

＜出願は全て郵送のみ＞

3. 検査項目等

推薦入学 (指定校制)	
面接および調査書を基に総合的に判定します。	
推薦入学 (一般公募制)	配点
適性検査 Ⅰ:英語 (コミュニケーション英語Ⅰ、コミュニケーション英語Ⅱ、 コミュニケーション英語Ⅲ、英語表現Ⅰ、 英語表現Ⅱ)	100
Ⅱ:化学(化学基礎、化学)	100
面接	40
調査書(国語と数学の評定平均値の合計×2)	20
ただし、一定基準に達しない検査項目があれば、不合格になることがあります。	

区分	一般A方式 (センター前期)	配点
数 学	数学Ⅰ・数学A、数学Ⅱ・数学B	200
外国語	英語 [リスニングの成績は利用しない]	200
国 語	国語 [近代以降の文章のみ利用する]	100
理 科	化学 [必須]、 物理、生物から1科目 [選択]	200

区分	一般B方式 (一般入試)	配点
数 学	数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学A、 数学B [数列、ベクトル]	200
外国語	英語 (コミュニケーション英語Ⅰ、コミュニケーション英語Ⅱ、 コミュニケーション英語Ⅲ、英語表現Ⅰ、 英語表現Ⅱ)	200
理 科	化学基礎、化学	200

4. 試験場

推薦入学試験／一般入学試験B方式

京都薬科大学キャンパス

※詳細については入学試験要項でご確認下さい。

お問い合わせ：入試課 TEL075-595-4678／FAX075-583-2232

区分	一般C方式 (センター後期)	配点
数 学	数学Ⅰ・数学A、数学Ⅱ・数学B	200
外国語	英語 [リスニングの成績は利用しない]	200
理 科	化学 [必須]、 物理、生物から1科目 [選択]	200

	薬学専攻 博士課程(4年制)	薬科学専攻 博士後期課程(3年制)	備 考
募集人員	(一般入試、社会人入試) 10名	(一般入試、社会人入試) 2名	
募集分野等	(募集分野等、協力分野) 19分野等	(募集分野、協力分野) 10分野	協力分野においても研究指導を受ける事ができる
出願資格	(1) 大学(6年制薬学部)を卒業した者 (2016年3月末日までに卒業見込の者を含む) (2) 4年制薬学部を卒業し、実務経験を2年以上有し、薬剤師免許を有している者(入学時において) (3) 外国において、学校教育における18年の課程(最終の課程は薬学)を修了した者 (4) その他、本学大学院において6年制薬学部を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者	(1) 修士(薬学、臨床薬学又は薬科学)又は理科系大学大学院において修士の学位を得た者(2016年3月末日までに当該学位取得見込の者を含む) (2) 外国において前号と同等以上と認められる課程を修了した者(修了見込の者も含む) (3) 大学を卒業したのち社会人として、大学・官公庁・企業・病院等において出願時に2年以上研究に従事した者で、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると本学大学院において認めた者 (4) その他、本学大学院において修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者	<薬学専攻> 募集分野等 薬品製造学分野、薬品分析学分野、代謝分析学分野、衛生化学分野、細胞生物学分野、生化学分野、病態生理学分野、病態生化学分野、薬物治療学分野、臨床薬理学分野、薬理学分野、臨床腫瘍学分野、薬剤学分野、薬物動態学分野、臨床薬学分野、臨床薬学教育研究センター (協力分野) 薬品化学分野、生薬学分野、公衆衛生学分野 <薬科学専攻> 募集分野 薬品化学分野、生薬学分野、公衆衛生学分野 (協力分野) 薬品製造学分野、薬品分析学分野、代謝分析学分野、細胞生物学分野、生化学分野、薬理学分野、薬剤学分野
主な出願書類	(1) 入学願書 (2) 成績証明書(本学卒業(見込)者を除く) (3) 卒業論文及び卒業論文の要旨(英文可)※1 (4) 志願者名票・受験票 (5) 出願資格(2)の者は薬剤師免許の写し (6) 卒業・修了(見込)証明書※2 (7) 出願資格(3)の者は住民票※3	(1) 入学願書 (2) 成績証明書(本大学院修了(見込)者を除く) (3) 修士論文及び修士論文の要旨(英文可)※1 (4) 志願者名票・受験票 (5) 研究業績録 (6) 修了(見込)証明書※2 (7) 出願資格(2)の者は住民票※3	※1卒業・修了見込者は卒業研究の概要(2,000字以内)1部(英文可) ※2本学卒業・修了(見込)者を除く ※3学術交流協定大学の卒業(見込)者は大学長等の正式な推薦状で代用可(任意)。その場合、入学手続き時に住民票の提出を求める。
関係日程	出願期間 (夏季募集) 2015年7月10日(金) ～ 2015年7月24日(金) [必着] (冬季募集) 2016年1月6日(水) ～ 2016年1月14日(木) [必着] 試験日 (夏季募集) 2015年8月21日(金) (冬季募集) 2016年1月29日(金) 合格発表日 (夏季募集) 2015年8月28日(金) 午後予定 (冬季募集) 2016年1月29日(金) 午後予定 入学手続期限 2016年3月18日(金) 入学金納付期限, 授業料前期分納付期限, 入学手続書類提出期限		
選考	面接試験 専攻に必要な研究能力について、卒業論文またはそれに相当する研究業績のプレゼンテーションを中心に行う。	専攻に必要な研究能力について、修士論文またはそれに相当する研究業績のプレゼンテーションを中心に行う。	

★出願に関する問い合わせ先

事務局入試課 〒607-8414 京都市山科区御陵中内町5 TEL075-595-4678

4年次生を対象に、医療者のためのくすりの本「治療薬マニュアル」を寄贈しました。実務実習前の事前学習として活用することができ、大変喜ばれています。

10月には例年通り教育後援会総会を開催いたします。詳細につきましては別途ご案内させていただきますので、多数のご参加をお待ちしております。

入試課

2015年5月

		一 般 入 試	社 会 人 入 試	備 考
募集人員		5名		(募集分野)
		若干名	若干名	
募集分野		薬科学専攻 10分野	薬科学専攻 10分野	薬品製造学分野、薬品化学分野、生薬学分野、薬品分析学分野、代謝分析学分野、公衆衛生学分野、細胞生物学分野、生化学分野、薬理学分野、薬剤学分野
出願資格		(1)大学を卒業した者(2016年3月末日までに卒業見込の者を含む) (2)本学が大学を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者*1 (3)外国において学校教育における16年の課程を修了した者	大学卒業後、社会人として1年以上の社会的経験を有する者 (出願時において)	*1:文部科学省の大学院入学基準を満たした専修学校専門課程の修了者又は、高等専門学校の専攻科を修了した者について、薬科学研究に必要な科目を履修した者を含む。
主な出願書類		(1)入学願書 (2)成績証明書(本学卒業者を除く) (3)志願理由書 (4)志願者名票・受験票 (5)出願資格(3)の者は住民票※ (6)卒業(見込)証明書	(1)入学願書 (2)成績証明書(本学卒業者を除く) (3)志願理由書 (4)志願者名票・受験票 (5)実務実績書 (6)卒業証明書	
関係日程	出願期間	2015年7月10日(金) ～ 2015年7月24日(金) 〔必着〕		※学術交流協定大学の卒業者(見込)は大学長等の正式な推薦状で代用可(任意)。その場合、入学手続き時に住民票の提出を求める。
	試験日	2015年8月21日(金)		
	合格発表日	2015年8月28日(金) 午後予定		
	入学手続期限	2015年9月10日(木)入学金納付期限 2016年3月18日(金)授業料前期分納付期限, 入学手続書類提出期限		
試験科目	外国語(英語)	4問題から2問題を選択解答 40点(20点×2)	_____	*2:系 Ⅰ系 創薬科学系 薬品製造学分野、薬品化学分野、生薬学分野 Ⅱ系 分析薬科学系 薬品分析学分野、代謝分析学分野、 Ⅲ系 生命薬科学系 公衆衛生学分野、細胞生物学分野、生化学分野 Ⅳ系 病態薬科学系 薬理学分野 Ⅴ系 医療薬科学系 薬剤学分野
	薬学専門	Ⅰ～Ⅴ系*2の10問題から2問題を選択解答 40点(20点×2問題)	_____	
	小論文他	_____	小論文(一般)小論文(専門)の2課題 成績証明書	
	面接試問	志願理由書を参考に試問	志願理由書・実務実績書を参考に試問	

★出願に関する問い合わせ先
事務局入試課 〒607-8414 京都市山科区御陵中内町5 TEL075-595-4678

本学で開催の「2015年度 卒後教育講座」を著作権・プライバシー等に抵触するスライドや音声を編集(削除・修正)し、WEB公開いたします。したがって、内容は本学で開催の講演とは異なります。

前期配信 2015年12月1日(火)～12月22日(火)		
1	医療の質改善と薬剤師の役割	聖路加国際病院 院長・福井 次矢 先生
2	皮膚疾患の漢方治療	聖光園 細野診療所 理事長・中田 啓吾 先生
3	薬局が変われば地域医療が変わる	ファルメディコ株式会社 代表取締役社長・狭間 研至 先生
4	社会保障制度の方向性とオール薬剤師の役割	公益社団法人 日本薬剤師会 顧問・児玉 孝 先生
後期配信 2016年1月8日(金)～1月29日(金)		
1	がん免疫療法：がん治療の第4の選択肢？	三重大学大学院医学系研究科 遺伝子・免疫細胞治療学 教授・珠玖 洋 先生
2	“危険ドラッグ”はなぜ危険なのか？	国立医薬品食品衛生研究所 生薬部 室長・花尻 瑠理 先生
3	乳がんの薬物療法	滋賀医科大学医学部附属病院 腫瘍センター 特任助教・河合 由紀 先生

注1) 詳細は、ホームページ(<http://skc.kyoto-phu.ac.jp/>)を参照してください。

申込受付期間、プログラム内容、配信期間等に変更される場合があります。

注2) 各ビデオ(1コマ：100分前後)は、各視聴期間中(前期・後期)、1コマにつき5回のみ視聴可です。

■ 認定単位

* 認定機関：共催 公益財団法人 日本薬剤師研修センター

* 単 位 数：G01(1コマ/1単位配付)計7コマ/計7単位(認定条件をみたすビデオのみ)

* 配付条件：1コマ毎に確認テストを実施。1テスト(3問)につき、正答率60%以上で単位を認定。各視聴期間(前期・後期)終了ごとに認定単位を配付。

■ 申込方法等

* 申込受付期間：2015年9月28日(月)～10月25日(日)

* 申込方法：WEB限定受付(TEL、FAX、メールでの受付不可)

<http://skc.kyoto-phu.ac.jp/>

* 受 講 者：薬剤師(京都薬科大学および本学以外の薬系大学の卒業生)

* 定 員：100名

* 受 講 料：15,000円

* 申込受付期間終了後に本講座専用のコンビニ振込票を送付しますのでコンビニにてお支払ください。
郵便局の振込票等、指定以外の振込票でのお振込はなさないでください。

過去の本学同窓会機関「京薬会」主催時とは振込方法が異なりますのでご注意ください。

* お支払されました受講料は、キャンセル・部分受講等による分割または差額返金の取扱いをいたしませんのでご了承ください。

■ 問合せ先

京都薬科大学 生涯教育センター

・TEL：075-595-4677 (TEL受付時間 平日のみ10:00～16:00)

・FAX：075-595-4683 (24時間受付)

・E-mail：skc-web@mb.kyoto-phu.ac.jp

■ 視点について ～部分と全体～

部分は部分であって、全体ではありません。

言うまでもなく当り前のことでは？という声が聞こえてきそうですね。ただ、実際のところ、ある部分を見て、それが全体であるかのように物事を捉えてしまっていることが案外あるのではないのでしょうか。

ある部分に注目したり、こだわってしまったりするあまりに、全体が見えなくなってしまう。それが全体であると思い込んでしまう。誰にでもそうしたことが起こり得るように思います。

次のようなインドの寓話があります。目の見えない状態で人々が象の足、耳、鼻、牙や尻尾など各々異なる部分を触り、その感想を述べ合うのですが、各自が触れた部位が異なることから、意見が食い違い、互いに己の正当性を主張して対立してしまいます。しかし、最終的にはそれが同じものの別々の部分であることに気づき、対立が解消されるというストーリーです。部分的な情報で全体をはかることはできない、物事は多様な部分から構成されていることの示唆をこの寓話から読みとることができます。

今、自分が把握していると考えているもの・感じていることが、事実の全てであるとは限らない。そう考えてみると、物事が違って見えてくるのではないのでしょうか。

自分が目を向けている側面は確かに部分として存在しているかもしれないけれど、それが物事の全てとは限らない。例えば、全てが上手くいかないように思っていたけれど、うまくいっていないのは或る部分であって、全てという訳ではない。そんな理解が生まれてくるのではないのでしょうか。

こうして言葉にしてみると、やはり当り前のことで、大仰に言う必要のない事では？という印象を受けるかもしれませんね。ただ、当り前のことを当り前にこなすことは中々難しいものではないかと思っています。

実際のところ、できていない部分にばかり焦点化してしまい、まるで部分が全体であるかのように判断してしまっていないのでしょうか。そのような態度・見方が自分に向けられると、自己評価を無用に低下させてしまい、物事に取り組む意欲を減退させてしまいかねません。一方、他者に向けられると、相手に対するネガティブな感情（苦手意識や嫌悪感など）を強めてしまい、関わりにくくなってしまうことがあります。

不安や心配から自分が問題と感じている部分に焦点化しすぎてしまっていないでしょうか？八方塞がりになっているけれど、実は気づいていない、目を向けていない道があるかもしれません。今、自分が感じたり、思っていたり、わかっていると思ったりしているものは、或る部分のことだけかもしれません。そんな視点を持って全体に目を向けていただきたいと思います。八方塞がりになっていた状況が違って見えてくることがある筈です。どうしても別の視点が浮かばないようなときは、信頼できる、そして自分とは異なる視点をもつ第3者の意見を聞いてみるのもひとつのやり方です。自分には見えていなかった側面に気づくきっかけになるかもしれません。

■ 学生相談室のご案内

● 相談

学生相談室における相談は、臨床心理士が担当し、学業、進路、課外活動、将来、対人関係、性格、家族、心身の健康についてなど、事の大小に関わらず学生生活に関わる様々な悩みや問題について幅広い相談をお受けしています。皆さんが気持ちや考えを整理したり、問題解決の糸口を探るためのお手伝いをいたします。

● サロンの開室

学生相談室内にサロンがあり、開室時に開放しています。疲れたとき、ホッとしたいときに、学内での居場所のひとつとしてご利用ください。飲食も可能です。

● 相談申込み・問合せ先

学生相談室 育心館 4階

相談を希望される方は、学生相談室に直接来室してお申込みいただくか、電話もしくはメールにて予約をお願いいたします。相談は無料です。

- ・開室（受付）時間：月～金 8：45～17：15
- ・電話：075-595-4672
- ・メール：gakusou@mb.kyoto-phu.ac.jp

※1 予約の際は、氏名、学籍番号、相談を希望する日時（第1・第2希望）をお知らせください。

※2 メールは予約受付のみで、相談対応は行っておりませんので、ご了承ください

京都薬科大学大学院薬学研究科をより深く知っていただくために、2014年4月号(No. 177)から大学院研究活動等を報告しています。ぜひご覧ください。

2月19日(木)・20日(金) 大学院英語セミナー「とにかく英語を口にしよう」

Philip Hawke講師(静岡県立大学大学院薬学部薬学科 科学英語分野・講師) Mini Conferenceでは大学院生が英語プレゼンテーションを実施し、これまで昼休みを利用して継続して行ってきたセミナーでの成果を発揮しました。(詳細はP25に掲載)

3月2日(月) 2014年度薬学研究科薬科学専攻博士前期課程修士学位論文口述発表及びポスター発表

博士前期課程2年次生4名が口述発表及びポスター発表を行いました。約80名の出席者となり、口述発表での質疑応答の時間で質問できなかった内容はポスター発表で受け付け、討論が繰り広げられました。

3月21日(土・祝) 学位記授与式

薬学専攻博士後期課程3名、薬科学専攻博士前期課程4名、論文博士1名が学位を授与されました。これからの活躍を大いに期待しています。

3月25日～28日 日本薬学会135年会(神戸)開催

本学学部学生及び大学院生が活発に発表を行い、6名の学生が優秀発表賞を受賞しました。

4月2日(木) 入学宣誓式

薬学専攻博士課程11名、薬科学専攻博士後期課程4名の皆さんが入学されました。新入生ガイダンスでは留学生も交えて1人ずつ自己紹介をし、研究科長から、交流を深めて分野の垣根を越えた研究を目指して欲しいとの激励がありました。

4月5日(日) 病院・薬局学内合同説明会

病院・薬局学内合同説明会に「大学院ブース」を設置し、大学院進学希望者からの質問等に研究科長が対応しました。大学院への感心が高まっていることもあり多数の学生から、大学院教育・研究等について質問がありました。

4月16日(木) 英語プレゼンテーション・SGD(自由科目)特別講演

演題: 「Unravelling dendritic cell development - One cell at a time」
樹状細胞発生の解明、一度に一細胞ずつ

講演者: Dr. Andreas Schlitzer



Dr. Andreas Schlitzer特別講演

4月20日(月) 大学院英語セミナー「とにかく英語を口にしよう」

勝見英正先生(薬剤学分野)「ブリティッシュ・コロンビア大学における研究留学」
どなたでも気軽に参加できます。不定期に開催していますので掲示で確認してください。

4月30日(木) 第6回KPUシンポジウム開催(主催: KPUシンポジウム実行委員会)

特別講演「探究心を持ち日々臨もう! 病院薬剤師として皆さんにつたえたいこと」
「製薬会社における創薬動態研究者の役割」をはじめ、他に5名の一般講演がありました。大学院生、学部学生、教員が多数参加しました。



とにかく英語を口にしよう

5月8日(金) 課程によらない博士学位論文口述発表開催

7名の発表者による口述発表となり、予定時間を大幅に超えた活発な質疑応答が行われました。大学院生・学部学生が多数聴講し、論文作成に必要な探究心、責任の重さを実感することとなりました。

5月11日(月) 大学院英語セミナー「とにかく英語を口にしよう」

内海大知さん(薬学専攻博士課程2年次 薬物治療学分野)が国際学会ポスター発表を行うため、先生、大学院生を前にしてリハーサルを行いました。



ポスター発表リハーサル

5月16日～19日 米国消化器病学会(AGA; American Gastroenterological Association)

上記、大学院英語セミナーでリハーサルを行った内海大知さんが米国消化器病学会でポスター発表を行いました。(詳細はP26に掲載)

■ ただ今留学中!

薬学専攻博士課程4年次生2名の学生が、3月から6か月間、
大学院生海外留学助成金により、ドイツ、イギリスへ留学し研究活動に邁進しています。

■ 第2回英語プレゼンテーションセミナー2014 「高度なプレゼンに挑戦！」

2015年2月19日（木）および20日（金）に「第2回英語プレゼンテーションセミナー2014」を行った。これは2014年11月に開催した英語プレゼンテーションセミナー2014の第2弾である。前回に引き続き、静岡県立大学薬学部薬学科（科学英語分野）講師のPhilip Hawke先生にご指導頂いた。1日目はClosed Sessionとして、研究室またはグループごとにプレゼンテーションの個別指導を、2日目には「Mini Conference 2014」を開催した。

19日は、個別指導を希望する大学院生または若手研究者が、事前に5分程度のプレゼン用スライド/ポスターを作製・準備（翌日のMini Conference 2014での発表内容）し、ホーク先生の前でプレゼンし個別指導を受けるという形式で行った。1人1人がプレゼンを行い、その都度ごとに発音やイントネーション、発表時の表情などについて細かくご指導頂いた。発音が正確でなければ相手には理解してもらえない、きちんと辞書やwebサイトでひとつひとつを確認するようにとのことだった。ホーク先生は、休憩時間も惜しんで熱心にご指導下さり、17時の終了予定時刻を過ぎた。



翌20日には、前日にホーク先生から個別指導して頂いた大学院生を中心とした「Mini Conference 2014」を学内で公開開催した。一般的な国際学会の形式に沿った口頭発表と質疑応答のスタイルで全て英語で行った。小暮先生のOpening Remarksで朝9:00に開始、大学院生11名、若手教員3名、研修員1名を分野関係なく4つのセッションに分けて行った。プレゼン時間は、各々の希望に合わせ、発表を10または5分とし、ディスカッション2分、フィードバック3分で行った。前日の個別指導内容をホーク先生がビデオに録画して各自に配付して下さったので、各院生はそのビデオを元に、19日夜から20日朝にかけて練習を重ねていたようである。Conference当日は、前日から格段にレベルアップしており、どの院生・教員も、発表時の表情は明るく、自信を持っている姿を嬉しく思った。発表者はもちろんのこと、フロアに参加して頂いた先生方や院生からの質問が活発であり、13:00に實川先生のClosing Remarksで締めくくられた。



今回は、発表前日の個別指導から、Mini Conferenceでの発表時に直接フィードバックを受けられるという素晴らしい機会であった。引き続きMini Conference 2015も開催予定であり、2014に参加した学生はさらにレベルアップを目指し、大学院新入生はこの機会を活用して、自分の研究を国内だけでなく、日本を飛び出して伝えたい！話したい！という気持ちを持って頂ければと思う。

（薬物治療学分野 講師 天ヶ瀬 紀久子）

■ 大学院英語セミナーを受講して

薬学専攻博士課程 3年次生 太田 智絵

大学院英語セミナーに参加する前は、私自身、とても英語を不得意としていることもあり、英語で話すことになかなか抵抗感がありました。

しかしながら、英語セミナーに参加するうちに、先生方のお力添えもあり、徐々に英語を口にする事ができるようになりました。最近では、研究室の外国人留学生の方と英語で交流する機会も増えて、少しずつではありますが、英語が上達してきたように感じています。また、Philip Hawke先生に英語のプレゼンテーションをご指導いただくという機会にも恵まれました。英語の発音や表現など、細かいところまでご指摘いただきました。

後日、英語プレゼンテーション・セミナーにも参加

させていただきました。プレゼンテーション・セミナーを通して、課題もみつかりましたので、さらに英語の勉強を継続して行い、海外の学会での発表にも機会があればチャレンジしたいと考えています。

先生方、本当にありがとうございました。

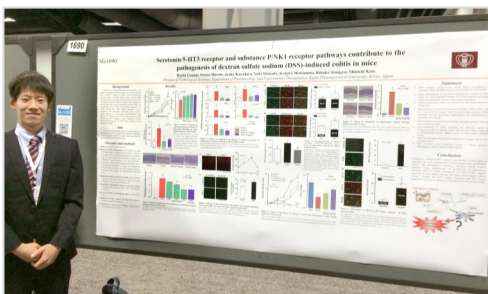


薬学専攻博士課程 (薬物治療学分野) 2年次生 内海 大知

5月16日よりアメリカのワシントンDCで行われた米国消化器病学会に、加藤教授、松本助教と一緒に参加した。国際学会におけるポスター発表は2度目である。昨年の同学会では、初めての国際学会で気持ちの高ぶりと不安な気持ちが入り交じった中での発表だった。もともと英語が得意な方ではないので、予想通り、額に汗を滲ませながらの質疑応答で、全く話すことが出来ず非常に悔しい思いをしたことが思い出された。

今年も不安が大きいまま、ポスターの前に立っていると、2人組のアメリカ人に、「ポスターの内容をジャッジするから話してくれないか?」と言われた。内心ドキッとしたが、一呼吸置いて説明した。質問もあったが難なく答えることができた。そして最後には、Thank

you so much!! と熱い握手を交わすことができ、私の気分は高揚した。



これが大きな自信となり良い緊張感を持ち、10人以上の研究者と英語で Discussion をすることができた。ジャッジマンに発表内容を一通り説明する機会があったことはラッキーだった。それ以降、緊張が解れ、自然と話すことが出来たからである。本学会に出発する前に、院生を対象とした英語セミナーで、實川先生にお声がけ頂き発表練習をする機会があった。このセミナーでは、小暮教授、加藤教授を含め多数の院生および留学生に私のプレゼンテーションを聞いて頂き、様々な指摘を頂いた。この経験は、当日の発表に大いに活かされたと実感した。



今回の発表で得た自信は、私にとって大きな刺激、そして成長に繋がったと同時に、これを糧に益々成長していきたいと思いワシントンを後にした。

最後になりましたが、今回学会発表の機会を与えて下さいました加藤教授、また学会参加にご配慮頂いた理事長、学長をはじめ、大学関係者の方々に深く感謝いたします。

受賞

Report

■ 日本薬学会第135年会において 優秀発表賞受賞

3月25日 (水) ~28日 (土) に神戸で開催された「日本薬学会第135年会」において本学の学生6名が優秀発表賞を受賞しました。

受賞者: 微生物・感染制御学分野 5年次生 上原 加預
演題: 黄色ブドウ球菌による緑膿菌増殖抑制へのNADH代謝の関与
演者: 上原 加預、松尾 悠美、田口 晃弘、林 直樹、加藤 文紀¹、鹿山 鎮男¹、菅井 基行¹、後藤 直正 (¹広島大学 大学院医歯薬保健学研究科)

受賞者: 病態生理学分野 6年次生 河西 翔平
演題: M-CSF を処置した骨髄由来アミロイドβ 貪食細胞の加齢に伴う機能変化の解析
演者: 河西 翔平、高田 和幸、黒田 絵莉子、杉野 友紀、北村 佳久、芦原 英司

受賞者: 薬品物理化学分野 5年次生 鈴木 智子
演題: 微弱低pH 応答性ペプチドSAPSp 修飾リポソームの腫瘍内動態
演者: 鈴木 智子、濱 進、板倉 祥子、中井 麻由美、中山 佳代子、森本 智士、小暮 健太郎

受賞者: 薬品物理化学分野 5年次生 鄭 賢卿
演題: 腫瘍組織間隙に浸透可能な柔軟性を有する siRNA封入キャリアーの開発
演者: 鄭 賢卿、宇野 晃平、島谷 悠里、濱 進、小暮 健太郎

受賞者: 薬物治療学分野 5年次生 川村 碧
演題: 5-フルオロウラシルおよびイリノテカンにより誘起される腸炎の病態の比較
演者: 川村 碧、杉浦 聡、河原 彩子、松本 健次郎、天ヶ瀬 紀久子、加藤 伸一

受賞者: 生化学分野 4年次生 池内 正剛
演題: v-Src 発現によるchromosome bridge 形成機構
演者: 池内 正剛、本田 拓也¹、福本 泰典¹、久家 貴寿、齊藤 洋平、山岸 伸行、山口 直人¹、中山 祐治

(¹千葉大学 大学院薬学研究科)

■ 第88回日本細菌学会総会において 優秀発表賞受賞

3月26日(木)～28日(土)に長良川国際会議場で開催された「第88回日本細菌学会総会」において微生物・感染制御学分野の5年次生 松尾悠美さんが優秀発表賞を受賞しました。

演 題：黄色ブドウ球菌による緑膿菌増殖抑制へのNADH代謝の関与

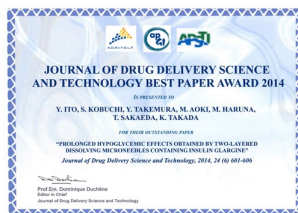
演 者：松尾 悠美、林 直樹、皆川 周、加藤 文康¹
鹿山 鎮男¹、菅井 基之¹、後藤 直正
(¹広島大学 大学院医歯薬保健学研究科)

■ Journal of Drug Delivery Science and Technologyの2014年度最優秀論文賞を受賞

日本薬剤学会公認英文雑誌「Journal of Drug Delivery Science and Technology」において、薬物動態学分野の伊藤由佳子講師が2014年度の最優秀論文賞を受賞しました。本受賞は持効型インスリンアナログとして開発されたインスリングルゲンを、当分野で考案されたマイクロニードルという新規のデバイスで製剤化し、その有用性が評価されたものです。

演 題：Prolonged hypoglycemic effects obtained by two-layered dissolving microneedles containing insulin glargine

演 者：Y.Ito, S.Kobuchi
Y.Takemura,
M.Aoki, M.Haruna
T.Sakaeda, K.Takada¹
(¹BioSerenTach Inc.)



■ 日本薬剤学会第30年会において日本薬剤学会永井財団学部学生七つ星薬師奨励賞を受賞

5月21日(木)～23日(日)に長崎で開催された「日本薬剤学会第30年会」において薬剤学分野の6年次生 笠谷早千巴さんが日本薬剤学会永井財団学部学生七つ星薬師奨励賞を受賞しました。

演 題：Curcuminの細胞層透過性－固体粒子と細胞層との接触の重要性－

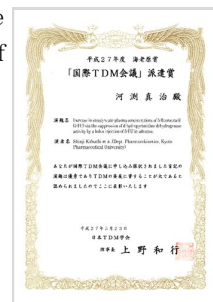
演 者：笠谷 早千巴、木村 峻輔、新谷 朋子
荒木 加永子¹、榎村 眞一¹、井上 大輔²
森山 圭²、古林 呂之²、草森 浩輔、勝見 英正
坂根 稔康、山本 昌
(¹エム・テクニク(株)、²就実大薬)

■ 第32回 日本TDM学会・学術大会において平成27年度 海老原賞「国際TDM会議」派遣賞を受賞

5月23日(土)、24日(日)に長野県松本市で開催された「第32回 日本TDM学会・学術大会」において薬物動態学分野の河渕真治助教が平成27年度 海老原賞「国際TDM会議」派遣賞を受賞しました。

演 題：Increase in steady-state plasma concentrations of 5-fluorouracil (5-FU) via the suppression of dihydropyrimidine dehydrogenase activity by a bolus injection of 5-FU in advance

演 者：Shinji Kobuchi
Yukako Ito
Takao Tamura^{1,2}
Toshiyuki Sakaeda
(¹Kinki University)
(²Kobe University)



※学年等は受賞当時のもので掲載しております

News お知らせ

人 事

任 命

教務部長	教 授 秋葉 聡
学生部長	教 授 安井 裕之
進路支援部長	教 授 西口 工司
図書館長	教 授 赤路 健一

(以上 任期：2015. 4. 1～2017. 3. 31)

創薬科学フロンティア研究センター長	教 授 赤路 健一
共同利用機器センター長	教 授 赤路 健一
薬用植物園長	教 授 松田 久司
臨床薬学教育研究センター長	教 授 矢野 義孝

(以上 任期：2015. 4. 1～2017. 3. 31)

研究科長	教 授 山本 昌
情報処理教育研究センター長	教 授 藤原 洋一

(以上 任期：2015. 5. 1～2016. 3. 31)

採 用

病態薬科学系病態生化学分野	助 教 河下 映里
---------------	-----------

(2015. 7. 1付)

(特命教員)

薬学教育系教育研究総合センター 臨床薬学教育研究センター	特命教授 四方 利和
---------------------------------	------------

(契約教員)

薬学教育系教育研究総合センター 学生実習支援センター	講 師 若槻 徹
-------------------------------	----------

(契約事務職員)

薬学教育系教育研究総合センター 臨床薬学教育研究センター	契約事務職員(事務員) 安川 智沙
生涯教育センター	契約事務職員(事務員) 小西 香苗

(以上 2015. 4. 1付)

退 職

(特命教員)

薬学教育系教育研究総合センター 臨床薬学教育研究センター	特命教授 西野 武志
---------------------------------	------------

薬学教育系教育研究総合センター 臨床薬学教育研究センター	特命教授 野出 學
---------------------------------	-----------

(以上 2015. 3. 31付)

学校法人京都薬科大学2014年度決算は、公認会計士、法人監事の監査を経て、2015年5月22日開催の理事会で審議・承認され、同日の評議員会に報告されました。

当年度に実施した主な施設整備事業は、南校地で厚生・実験棟の建設工事が2014年9月に竣工し、学生から名称を募集して南風館と命名しました。南風館の延床面積は425.72㎡で、2つのセミナー室、自習室、談話スペース及びコンビニエンスストアを備え、実験棟の機能として抽出室、還元室を有しています。南校地では他に警備員室の建設、南校地舗装・正門・北境界塀・植栽他の外構改修工事等を行いました。これで、2011年の南校舎の解体にはじまり、その後のバイオサイエンス研究センター建設、南風館の建設までの4年間にわたる南校地の整備工事が当初の計画どおり完成しました。

また、本校地で新体育館兼中央講堂（仮称）の建替工事がはじまり、中央講堂兼体育館の建物取壊し経費を支出しました。

その他の主な事業としましては、前年度に引き続き

2014年度決算の概要は次のとおりです。

■ 資金収支計算書総括表（表1）

学生生徒等納付金収入は、入学者数が定員360名に対し378名となったことなどで予算額を上回り4,368百万円になりました。手数料収入は、入学志願者数が前年より431名減（13.8%の減）の2,687名となりましたが、試験料など他の科目の収入増もあって、ほぼ予算額どおりの96百万円となりました。寄附金収入は、21百万円となりました。奨学金制度充実のための寄附募集および創立130周年記念募金に多数の方からご賛同いただきました。創立130周年記念募金は、2014年度も引き続き多数の方からご賛同をいただきました。しかし、研究助成を目的とした企業等からの一般寄附金では、経済情勢などの影響から11百万円と予算額に対して50%の達成に留まりました。補助金収入は、530百万円で予算額を12百万円上回りました。対前年比で見ると、一般補助が5百万円増、特別補助が29百万円の増となりました。資産運用収入は、172百万円で予算額を8百万円上回りました。資産売却収入は、各種事業資金の充実を意図した国債の売却差益の獲得及び利率の高い銘柄への移行を目的に買替えを行いました。事業収入は、企業等からの委託研究費が前年度と比較すると増加しましたが、事業収入全体では予算額を3百万円下回り42百万円となりました。雑収入は94百万円で、主

■ 消費収支計算書総括表（表2）

学生生徒等納付金収入は予算に対し57百万円増の4,368百万円となり、帰属収入に占める割合（学納金比率）は81%と大きな比重を占めています。補助金収入は国庫補助金が主なもので、530百万円で帰属収入に占める割合（補助金比率）は10%です。また、国債の買替えによる資産売却差益が79百万円となり、帰属収入合計は5,414百万円となりました。また、基本金の組入

文部科学省の助成事業に積極的に申請し、私立大学改革総合支援事業のうち、タイプ1「教育の質的転換」に採択された他、私立大学等教育研究活性化設備整備事業（補助金額81百万円）、私立大学戦略的研究基盤形成事業に継続2件（補助金額30百万円）、私立学校施設整備費補助金（私立学校教育研究装置等施設整備費補助金）に1件（補助金額21百万円）、私立大学研究設備整備費補助金に1件（補助金額12百万円）、および大学改革推進等補助金（がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン）に1件（補助金額10百万円）、総額154百万円の補助金を獲得しました。

また、第2号基本金には、新体育館兼中央講堂の新築費・南校地整備事業費に5億円および教育研究総合センター等の整備事業費として3億円の合わせて8億円を組入れました。さらに、第3号基本金には、本学の奨学金制度の充実を図る奨学基金に4億円、若手研究者の研究活動を積極的に支援する科学振興基金として1億円の合わせて5億円を組入れました。

なものは私立大学退職金財団からの交付金です。その他の収入では、国債の買い替えと前期末収入金がいずれも予算額を大きく上回り、3,462百万円となりました。

一方、資金支出では、人件費は、当初計画通りの採用・補充ができなかったため、1,760百万円と予算額を下回りました。教育研究経費は、消耗品支出など一部の科目で予算額を上回る支出となりましたが、研究費支出が補助事業の不採択等により予算額を91百万円下回るなどにより、教育研究経費全体では予算額を下回り1,287百万円となりました。管理経費支出も予算額を下回り255百万円となりました。施設関係支出では、南校地整備計画による南風館及び警備員室建設工事費、外構工事費などで、413百万円となりました。設備関係支出では、補助金事業に採択され購入した教育研究用機器備品及び実習用機器などの整備で308百万円となり予算額を55百万円上回りました。資産運用支出は5,341百万円で、国債の買替え、新規購入及び資産運用収入の引当資産への繰入れです。主なものは、第2号基本金引当資産に805百万円、奨学基金引当資産に403百万円、科学振興基金引当資産に100百万円、第4号基本金引当資産に18百万円をそれぞれ繰入れしました。

以上により、次年度繰越支払資金は、2,211百万円となりました。

これは、第1号基本金には南風館建設、機器備品購入などにより636百万円、第2号基本金には、新体育館建築及び南校地環境整備計画として502百万円、教育研究総合センター等の整備費に303百万円組入れ、逆に新体育館建築及び南校地環境整備計画のために第2号基本金から第1号基本金に355百万の振替を行いました。また、第3号基本金には奨学基金に403百万円、科学振興基金に

100百万円を組入れるなど、計1,608百万円の基本金組入れとなりました。この結果、消費収入の部合計は、3,806百万円となりました。

一方、支出においては、人件費及び教育研究経費の減少により、消費支出の部合計は予算額を329百万円下回り4,324百万円となりました。この結果、当年度消費収支差額は518百万円の支出超過となりましたが、前年度か

■ 貸借対照表総括表（表3）

有形固定資産は、南風館の建設、教育研究用機器備品の購入などに伴う増から、中央講堂兼体育館の取り壊し、機器備品の廃棄及び減価償却などに伴う減を差引きした結果、前年比281百万円減の14,396百万円になりました。その他の固定資産は、第2号基本金引当資産に450百万円、第3号基本金引当資産に503百万円、第4号基本金引当資産に18百万円の繰入れなどを行い、前年比1,134百万円増の16,051百万円となりました。また、流動資産は、現金預金が179百万円増加し、前年比193百万円増の2,471百万円となりました。その結果、資産の部合計は32,919百万円となり、1,045百万円の増加となっています。

負債のうち、固定負債914百万円は退職給与引当金と

らの消費収入超過額891百万円を加え、翌年度に繰越す消費収支差額は372百万円の収入超過となっています。

また、当年度の消費収支決算においては、経営判断の指標となる帰属収支差額（帰属収入合計－消費支出合計）が1,090百万円となり、帰属収支差額比率は20.1%となりました。

教育研究用機器備品リース料の長期未払金を計上しています。流動負債770百万円は、未払金、前受金、預り金を計上しています。この結果、負債の部合計は1,685百万円となっています。

基本金の部は、前述のとおり第1号基本金には636百万円、第2号基本金には805百万円、第3号基本金には503百万円、第4号基本金に18百万円を組入れています。また、第2号基本金から第1号基本金に355百万の振替を行いました。その結果、基本金の部合計は30,860百万円となり、前年比1,608百万円の増加となっています。

消費収支差額の部は、前述のとおり翌年度繰越収入超過額が372百万円となりました。

以上

表1 資金収支計算書（総括表）

2014年4月1日～2015年3月31日（単位：千円）

収入の部				支出の部			
科 目	予 算	決 算	差 異	科 目	予 算	決 算	差 異
学生生徒等納付金収入	4,311,200	4,368,600	△ 57,400	人件費支出	1,865,500	1,760,153	105,346
手数料収入	96,700	96,641	58	教育研究経費支出	1,473,500	1,287,624	185,875
寄付金収入	35,000	21,763	13,236	管理経費支出	285,500	255,916	29,583
補助金収入	518,500	530,174	△ 11,674	施設関係支出	470,200	413,394	56,805
資産運用収入	164,700	172,954	△ 8,254	設備関係支出	253,400	308,436	△ 55,036
資産売却収入	0	1,522,195	△ 1,522,195	資産運用支出	2,012,500	5,341,958	△ 3,329,458
事業収入	45,400	42,116	3,283	その他の支出	709,500	771,493	△ 61,993
雑収入	72,000	94,401	△ 22,401	予備費	20,000		20,000
前受金収入	581,200	581,229	△ 29	資金支出調整勘定	△ 213,000	△ 200,578	△ 12,421
その他の収入	1,618,600	3,462,302	△ 1,843,702	次年度繰越支払資金	1,785,700	2,211,078	△ 425,378
資金収入調整勘定	△ 692,700	△ 774,648	81,948				
前年度繰越支払資金	1,912,200	2,031,745	△ 119,545				
収入の部合計	8,662,800	12,149,477	△ 3,486,677	支出の部合計	8,662,800	12,149,477	△ 3,486,677

表2 消費収支計算書（総括表）

2014年4月1日～2015年3月31日（単位：千円）

収入の部				支出の部			
科 目	予 算	決 算	差 異	科 目	予 算	決 算	差 異
学生生徒等納付金	4,311,200	4,368,600	△ 57,400	人件費	1,840,900	1,755,504	85,395
手数料	96,700	96,641	58	教育研究経費	2,279,500	2,074,252	205,247
寄付金	45,000	29,661	15,338	管理経費	388,500	359,186	29,313
補助金	518,500	530,174	△ 11,674	資産処分差額	125,000	131,168	△ 6,168
資産運用収入	164,700	172,954	△ 8,254	(予備費)	20,000		20,000
資産売却差額	0	79,885	△ 79,885	消費支出の部合計	4,653,900	4,324,287	329,612
事業収入	45,400	42,116	3,283				
雑収入	72,000	94,401	△ 22,401	当年度消費収支差額	981,700	518,128	
				前年度繰越消費収支差額	900,300	891,085	
帰属収入合計	5,253,500	5,414,435	△ 160,935	基本金取崩額	0	0	
基本金組入額合計	△ 1,581,300	△ 1,608,275	26,975	翌年度繰越消費収支差額	△ 81,400	372,957	
消費収入の部合計	3,672,200	3,806,159	△ 133,959				

表3 貸借対照表（総括表）

2015年3月31日現在（単位：千円）

資産の部				負債の部			
科 目	本年度末	前年度末	増 減	科 目	本年度末	前年度末	増 減
固定資産	30,447,155	29,594,789	852,366	固定負債	914,948	911,468	3,480
有形固定資産	14,396,145	14,678,020	△ 281,875	流動負債	770,251	817,890	△ 47,638
その他の固定資産	16,051,009	14,916,768	1,134,241	負債の部合計	1,685,200	1,729,358	△ 44,158
流動資産	2,471,954	2,278,331	193,623	基本金の部			
現金預金	2,211,078	2,031,745	179,332	科 目	本年度末	前年度末	増 減
その他の流動資産	260,876	246,586	14,290	第1号基本金	23,288,459	22,652,240	636,219
				第2号基本金	1,916,479	1,466,313	450,166
				第3号基本金	5,398,013	4,894,123	503,890
				第4号基本金	258,000	240,000	18,000
				基本金の部合計	30,860,952	29,252,677	1,608,275
				消費収支差額の部			
				科 目	本年度末	前年度末	増 減
				翌年度繰越消費収入超過額	372,957	891,085	△ 518,128
				翌年度繰越消費支出超過額			
				消費収支差額の部合計	372,957	891,085	△ 518,128
資産の部合計	32,919,110	31,873,120	1,045,989	負債の部、基本金の部及び消費収支差額の部合計	32,919,110	31,873,120	1,045,989

(注) 減価償却の累計額の合計額 8,607,847千円

徴収不能引当金の合計額4,175千円

表1、表2、表3とも単位未満切捨て

研究資金には、毎年大学から支給される研究費のほか、国から助成される科学研究費（私学助成金を含む）、財団から助成される研究費、企業からの寄付金や受託研究費などがあります。国からの研究費は文部科学省をはじめ厚生労働省、経済産業省などから助成されていますが、いずれも厳しい審査の結果、採択されます。最も金額の大きいのが文部科学省の「科学研究費助成事業」（略して「科研費」と呼んでいます）です。科研費の募集枠は金額によって分類されていて、個人で申請するものや複数の研究者で申請するものがあります。

下表には代表者のみ記載されていて、分担者として

他の大学の先生と共同研究をされている場合は含まれていません。また、1人の研究者があまり多くの枠に申請できないように制限も設けられています。

今年度は、新規で36件申請して10件が採択されました（新規採択率27.78%）。

前年度からの継続分とあわせると、合計採択件数は43件、交付予定総額は70,850千円（他機関からの転入者含む）となっています。

なお、特別研究員奨励費は下表には記載していません。研究活動スタート支援（新規分）は現在申請中です。

研究種目	研究代表者	分野名	課題名	交付予定額 (千円)	新規・継続等
新学術領域研究(研究領域提案型)	小暮 健太郎	薬品物理化学	画像解析による微弱電流依存性の細胞内輸送亢進機構解明と革新的指向性DDSへの展開	2,990	継続
基盤研究(C)一般	藤室 雅弘	細胞生物学	Wntシグナルと小胞体ストレス応答を標的としたKSHV分子海賊機構の解明	1,820	新規
"	伊藤 由佳子	薬物動態学	オキサリプラチンベース化学療法における有害事象予防システム	1,950	新規
"	辻本 雅之	臨床薬学	慢性腎臓病患者において生じる予測不能の薬物相互作用のメカニズム解明	2,080	新規
"	濱 進	薬品物理化学	腫瘍微小環境応答性ペプチド搭載核酸キャリアーの開発と肝転移がん治療への展開	1,560	新規
"	勝見 英正	薬剤学	活性酸素消去による転移性前立腺癌治療を目指した体内動態制御型白金ナノ粒子の創製	1,950	新規
"	赤路 健一	薬品化学	基質型阻害剤との複合体構造解析に基づく非ペプチド型プロテアーゼ阻害剤の開発	1,040	継続
"	秋葉 聡	病態生化学	IVA型PLA2を病態制御標的分子とした脂肪肝の発症機構と進展阻止に関する研究	1,430	継続
"	芦原 英司	病態生理学	骨髄低酸素微小環境に潜む多発性骨髄腫幹細胞の根絶をめざした新規治療法の開発	1,950	継続
"	大矢 進	薬理学	免疫疾患、癌治療標的分子としての酸感受性カリウムチャネルの制御機構解明	1,300	継続
"	加藤 伸一	薬物治療学	腸管マクロファージに発現するNOX1の機能および消化管炎症の病態との関連の解明	1,170	継続
"	中田 徹男	臨床薬理学	脳心腎連関におけるエリスロポイエチンのADMAを介する臓器保護機序の解明	1,040	継続
"	中山 祐治	生化学	Srcシグナルによる細胞分裂制御機構とその破綻による細胞癌化	1,300	継続
"	西口 工司	臨床薬学	食道がんに対するビスホスホネート系薬剤を用いた新規治療法の開発	1,690	継続
"	野崎 亜紀子	一般教育学	リスク社会における自由と協働の秩序	1,430	継続
"	細井 信造	薬学教育研究センター	誘起CDIに基づく実用的絶対配置決定法の確立とその起源解明への量子化学的アプローチ	1,690	継続
"	松田 久司	生薬学	健胃生薬を素材とした食欲シグナル制御物質の開拓	1,560	継続
"	安井 裕之	代謝分析学	抗糖尿病薬として内因性インスリンの作用を調整・増強する経口亜鉛製剤の開発	1,950	継続
"	山本 昌	薬剤学	生体分解性マイクロニードルを用いたテリパラチドの次世代型経皮吸収製剤の開発	1,430	継続
"	渡辺 徹志	公衆衛生学	炎症・アレルギー性物質の長距離大気輸送及びその生物活性の解明	1,820	継続
"	中田 晋	臨床腫瘍学	トランスボゾン誘導性膠芽腫モデルを用いたLgr5+細胞の特性と新規治療標的の解明	1,430	継続
"	中村 誠宏	生薬学	メディシナルフラワーを素材とした潰瘍性大腸炎治療物質の開発	1,950	継続
"	天ヶ瀬 紀久子	薬物治療学	グルタミン酸によるヘリコバクター・ピロリ関連胃病変の発生と定着抑制機序の解明	1,170	継続
"	石原 慶一	病態生化学	ダウン症マウスモデルの脳発達遅滞および記憶学習障害の分子基盤解明と炎症亢進	1,170	継続
"	小島 直人	薬品製造学	新規抗がん剤の創出を目指すデュアルコア型アセトゲニン類の構造活性相関研究	1,820	継続
"	本橋 秀之	臨床薬学教育研究センター	データベース活用から抽出される重篤副作用のトランスポータを考慮した発症機序解明	1,170	継続
"	久家 貴寿	生化学	FAM83H遺伝子変異に起因するエナメル形成不全症の発症メカニズム解析	2,470	継続
"	鳥羽 裕恵	臨床薬理学	高尿酸血症合併慢性腎臓病治療におけるシルニジビンの有用性の検討	1,300	継続
挑戦的萌芽研究	小暮 健太郎	薬品物理化学	腫瘍組織への自走侵入可能なpH感受性べん毛駆動型リボソームの創成	1,690	新規

研究種目	研究代表者	分野名	課題名	交付予定額 (千円)	新規・継続等
若手研究(A)	木村 寛之	代謝分析学	原発性アルドステロン症診断のためのCYB11B2標的イメージングプローブの開発	4,030	継続(転入)
若手研究(B)	坂本 尚志	一般教育学	『分析手帖』の研究—1960年代フランスにおける「概念の哲学」の発展	1,170	新規
〃	河淵 真治	薬物動態学	母集団PK-PD解析による血漿中薬物濃度を用いたがん化学療法法の個別化	1,040	新規
〃	小林 数也	薬品化学	N-アミジノ含窒素環状骨格を基盤としたBACE1阻害剤の開発研究	2,210	新規
〃	草森 浩輔	薬剤学	がん標的型高性能細胞製剤の開発および難治性がん治療への応用	2,210	新規
〃	藤井 正徳	薬理学	脳ニューロステロイドをターゲットとした新規アトピー性掻痒治療薬の創出	1,690	継続
〃	西田 健太郎	衛生化学	味噌におけるATPクリアランス機構に着目した抗がん剤による味覚障害発症機構の解明	1,040	継続
〃	沼尾 成晴	健康科学	筋肉・脂肪組織由来の新規生理活性物質からみた心疾患患者に対する運動療法の効果	1,040	継続
〃	齊藤 洋平	生化学	腫瘍組織における熱ショックタンパク質Hsp105の発現亢進とその癌悪性化誘導	1,040	継続
〃	林 直樹	微生物・感染制御学	緑膿菌の腸管上皮細胞感知メカニズムの解析	1,560	継続
〃	星谷 尚亨	薬化学	第3級炭素-水素結合活性化を鍵とする光学活性多置換アリールシクロプロパン合成法	1,950	継続
〃	松本 健次郎	薬物治療学	炎症性腸疾患患者とモデル動物におけるTRPM2受容体の病態への関与	1,170	継続
〃	丹羽 里実	薬理学	癌細胞におけるホルモン療法及びアポトーシス耐性獲得とイオンチャンネル活性・発現制御	2,080	継続
研究活動スタート支援	扇田 隆司	薬品物理化学	回転・分泌相関の可視化による細菌Ⅲ型分泌装置のエフェクター分泌機構の解明	1,300	継続

News クラブだより

マンドリン部

こんにちは。マンドリン部です。私たちマンドリン部は年に一度の定期演奏会に向けて練習を重ねています。また、駅前でアンサンブルを行ったり活動の場を広げ和気あいあいと頑張っています。

今年も新入部員がたくさん入ってきてくれ、先輩と後輩の交流もより活発になっています。4月末には京都にある10大学が集まった全日本学生マンドリン連盟・京都ブロックの合同演奏会に参加し他大学とも交流してきました。

卓球部

【戦績】

- ・西日本医歯薬卓球大会
女子シングルス・・・5位（東馬）
- ・関西医歯薬卓球大会
女子シングルス・・・2位（岸本）

【今後の予定】

- 6月 春の四薬卓球大会
- 8月 全日本薬学生卓球大会
関西医歯薬卓球大会
- 11月 秋の四薬卓球大会

漢方医学研究部

こんにちは、漢方医学研究部です。私達は週3回(月、水、金)集まり、大勢の方に漢方に興味を持ってもらえることを目標に活動しています。例えば、週1で部内発表を行う、漢方の情報を部内で共有などのことを行っています。

今年は薬膳料理会、植物園見学、ハーブティーの試飲会などの行事を予定しています。

ソフトテニス部

活動実績

関西薬学生ソフトテニス六校リーグ

男子団体 3位

女子団体 予選リーグ3位

個人戦 雨天により中止

関西医歯薬ソフトテニス大会

男子団体 2回戦敗退

女子団体 1回戦敗退

個人戦 雨天により中止

今後の予定

5月 四薬戦

8月 関西薬学生ソフトテニス大会

11月 関西薬学生ソフトテニス六校リーグ

4月 関西医歯薬ソフトテニス大会

剣道部

剣道部の活動日は月曜日、水曜日、金曜日の17時から19時までです。

今年は新入生が9人入部し、部員が24人になりました。部員の大半が大学から剣道を始めた初心者で占めています。しかし、医歯薬学生剣道大会や関西薬学生剣道大会、全国薬学生剣道大会で団体戦の部で3位、個人の部で3位など様々な大会で入賞しています。

6月には医歯薬学生剣道大会、京滋学生剣道大会があるので、日々試合に向けて稽古しています。

今年は部内でスポーツ大会やBBQなどを予定しており、練習だけでなく遊びも充実しています。

茶道部

茶道部は毎週火曜日に学外から裏千家の先生をお迎えしてお稽古をしています。お稽古の時間の都合上在籍人数は各学年10名ほどという制限を設けていますが、個性豊かな部員と先生とで毎回和やかにお稽古が行われています。先生からはお点前の指導だけでなく茶道具に関するお話も聞くことができるので、毎週新しい知識が増えていきます。4月後半には毎年春茶会を開き、2年次生と

4年次生が着物姿でお点前を披露します。今年は京都の建仁寺で行いました。他大学の茶道部の方や先輩をはじめたくさんの方にお越しいただき、今年度の春茶会も無事成功させることができました。関わってくださったすべての方々に心より感謝申し上げます。秋に行われます文化祭では、『京わらべ』として茶道部らしいおもてなしができたかと部員一同案を出し合っております。楽しみにしていただければ幸いです。

京都薬科大学奨学寄附金芳名録

Report

下記の方々からご寄附をお寄せいただきました。ご協力ありがとうございました。

- * 高額のご寄附（10万円以上）を頂いた方は、京都薬科大学奨学金規則及び学生便覧に掲載させていただきます。
- * 敬称略、芳名のみ掲載しております。

2015年3月～2015年5月にご寄附をお寄せいただいた方々

< 卒業生・同期会等（卒業年次順）>

森 博直(昭24)	塩川 和子(昭36)	久米 和子(昭43)	岡本 妙子(昭49)	張 賢二(平01)
大澤 裕通(昭26)	松山 牧子(昭37)	富永 護(昭43)	大石 美恵(昭51)	西澤 善子(平03)
岩城 宗吉(昭28)	本岡 美智子(昭37)	水口 葉子(昭43)	丹所 稔(昭51)	山下 和紀(平08)
安藤 寛治(昭29)	秋吉 淑子(昭40)	高越 清昭(昭44)	森 一二美(昭52)	尾崎 朋久(平11)
永浜 淳子(昭31)	森 道子(昭41)	蘆田 康子(昭45)	奥川 斉(昭53)	本田 哲郎(平25)
中道 律子(昭31)	黒田 和夫(昭42)	稲垣 美幸(昭45)	奥川 信子(昭53)	生越 由美(平26)
鶴山 邦子(昭32)	谷口 睦子(昭42)	岩瀬 弘子(昭46)	平野 隆(昭55)	
辻 勝蔵(昭34)	森川 信子(昭42)	木島 早苗(昭46)	高美 美鶴(昭56)	
水谷 康宏(昭34)	山口 博行(昭42)	鍵山 稔明(昭47)	中森 省吾(昭56)	
恩塚 有子(昭36)	金田 吉男(昭43)	井上 佳昭(昭49)	守友 早恵(昭62)	

< 京薬四〇会卒業50周年記念募金（昭和40年卒業生）（五十音順）>

磯田 健一	加納 邦彦	久山 弥栄	虎谷 久美子	安井 哲
宇都宮 郷宏	川端 敏雄	杉原 禮雄	西島 功二	吉岡 孝磨
大杉 照子	貴宝院 善博	千田 多賀夫	宮本 政樹	

< 企業・団体・一般 >

石田 隆一

< 法人役員・評議員・職員（五十音順）>

乾 賢一(学 長)	高美 時郎(評議員)	中村 誠宏(准教授)	森 新(評議員)	山下 豊彦(課 長)
神田 和正(評議員)	武田 禮二(理事長)	開 章宏(講 師)	森田 和子(理 事)	山田 作夫(評議員)
久米 光(評議員)				

(2015年5月31日現在)

2015年度KPU_{NEWS}編集委員は下記の皆さんにお願いすることとなりました

< 委員長 >

鈴木 栄樹(教 授)

< 委員(教育職員) >

大矢 進(教 授)

藤室 雅弘(教 授)

藤原 洋一(教 授)

長谷井友尋(助 教)

< 委員(事務職員) >

井本富美代(学生課長)

川勝 章広(企画・広報課課長代理)

< 委員(学生) >

岩崎 仁志(3年次)

山本 倭子(3年次)

丸川 裕己(2年次)



KPU_{NEWS} No. 182 2015年7月発行／編集：KPU_{NEWS}編集委員会

発行：京都薬科大学 〒607-8414 京都府京都市山科区御陵中内町5 ☎075-595-4691(企画・広報課)